

---

# 生徒会のIf

八田 未来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生徒会のIf

### 【Nコード】

N4788U

### 【作者名】

八田 未来

### 【あらすじ】

碧陽学園、1年生の秋峰葉露は憂鬱だった。従姉であり同居している国立凛々に想いを寄せているが一向に想いが伝わらないからだ。そんなある日、ある出来事でクラスメートの椎名真冬が葉露に特別な気持ちを持ってしまう。

そんな現状をハーレム願望を持っている杉崎鍵が見過ごせる訳がなく葉露を敵対する

憧れの先輩である鍵と思ってもかけない敵対となってしまう苦難する葉露は

## 01話 計算高い女

夜、いつもの様に風呂に入り、いつもの様にリリ姉にバスタオルを隠されるといふ地味な悪戯をくらった。

一回やると、止められない性らしく1日も休む事なく続けられている。

何でも、困った僕の様子が可愛いからという理由らしい。全くもつての弟扱い。やれやれ

リリ姉こと国立凜々（くにたち りり）は僕の従姉である。

そして姉でもある。

僕の実の姉を気取っているその理由は、病気で亡くなった姉の原因は自分にあると嫌悪していてその代償を償っている。

僕にとってそれは物凄く困る訳で

僕はリリ姉が大好きだ。もちろん異性として

だけど、リリ姉はいつまでも僕を男としては見てくれない。そんな気持ちに嘔み締めながら毎日眠りにつくのは僕にとって耐え難い程に苦痛だった。

朝、教室に入る。人はまだ疎らでいつも騒がしい教室なのが嘘の様だ。毎回こうだと嬉しい

「おっ！」

俺の隣の席は椎名だ。

椎名真冬。現生徒会（全く仕事をしていない）のメンバーである。人気投票で選ばれ（こんなのが人気なのか）た。

別に仲が良いわけでもないが珍しく朝早く来た椎名に僕は驚きの声をあげた。

「珍しいな廃人寸前の椎名がこんな朝早く学校来るなんて」

手持ち用ゲームPFPに目を落としていた椎名が、僕の声に反応しこちらを向いた。

「あっおはようですアキバ君」

アキバとは僕のあだ名である。

一刻も早く止めてほしいのだがその願いは未だに届いていない。

僕は席に座り、頬杖をついて椎名を見つめた。

「な、何ですかアキバ君！セ、セクハラです！」

「お前はいいよな悩みがなくて」

僕なんか家に帰るたびに悩みが増えていくっていうのに

「いきなり罵倒は酷いです！真冬にだって悩みぐらいありますよ」

頬を膨らまして椎名は反論してきた。

椎名の悩みか…少し気になるな

「悩みつて？」

聞くと、椎名は胸を張って答えた。

「最新ゲームの発売日やBL本の発売日に真冬の財布事情やら最近では」

「あーもういいわ」

椎名に聞いた僕がバカらしくなって、話を打ち切った

でも、椎名の生き方が理想だとは思っている。

人間悩みがないのが一番いいに決まっているから。

「むーアキバ君は意地悪です」

「気にすんな」

リリ姉は今、先生の手伝いをしている。

廊下で連れていかれるのをさっき見た。

「アキバ君もやりますか？」

リリ姉の事を考えていたら不意に椎名の声が聞こえてきた。

椎名の方向を向くと片手にもう1つのピンクのPFPを僕に差し出していた。

「ゲームなんてやった事ないんだけどな」

PFPを受け取って電源を入れる。

「大丈夫ですよ。これは初心者でも簡単に操作出来る対戦ゲームですから」

電源を入れてしばらく待つてみるとタイトルが表示された

『royal edition2』

2つて事は続編物。つまり人気があるゲームという事が分かった

「真冬も手加減しますよ！」

笑顔で椎名はもうキャラクターを選びにかかっていた。

ゲームやってる時は毎回笑ってるよな椎名つて。

僕も適当にキャラクターを選択して、決定ボタンを押した。

結果は全敗っていうか1ダメージも与えられなかった。

「手加減するんじゃないのか」

「真冬は手加減しましたよ」

くそつニコニコ笑いやがって憎い

「まさかお前さつき僕にバカにされたお返しに！」

「ふ〜ん ふ〜ん ふふ〜ん」

椎名真冬。こいつは天然に見えて実は計算高いのかも知れない…

## 02話 想いを一つに

ガラっという音と共に教室の扉が開いた。

扉の方に顔を向けるとリリ姉がなにやら思案顔でこちらに向かってきていた。

「委員長、手伝いは終わったの」

僕の問いかけに一呼吸置いてからリリ姉は答えた

「確かに終わったのですが、まだあると言いますか…」

「？」

「そろそろ文化祭があるじゃないですか。その計画などを考えないといけなくて」

「あー」

気がつけば碧陽の文化祭は後1ヶ月に迫っていた。

「真冬達もこれから大変ですー…」

椎名も会話に入ってきた

「ふーん…と言っても僕に出来る事なんて何も無いしなあ」

僕は、はしゃぐ事はあまり得意ではないので文化祭などは余り積極的に行わない。

普段つるさいここだって嫌悪しているのに

「あつそんな事はないですよ！葉露君には色々手伝ってもらつことがあるので」

「えっ！」

勝手にリリ姉の手伝いを行うことになってしまった。

「今日は文化祭で1ーCが何を行うか決めるのでとりあえず葉露君には書記を頼みます」

「えええ！そんなの椎名に頼んでよ…生徒会メンバーだし」

その会話を聞いた椎名が反論をしてきた。

「そんな事は出来ません！生徒会も色々忙しいのです！」

「あつ…ごめん椎名。僕、思ってる事をすぐ口に出しちゃうクセがあつて」

「そうだ。椎名だって生徒会で忙しいんだつたよな反省しないと」

「そうですねよアキバ君！真冬は授業中も生徒会会議の時もモンハンで忙しいのです！」

「仕事しろよ」

椎名に謝ろうとした僕がバカだった。

結局事の成り行きで僕が書記をやる事に決まりましたと

三限目にホームルームがあつたのでそこで何をするかを決め会う事になった。

卓上にリリ姉が立ち僕は黒板に向かいチョークを持った。

「それではみんなまずは文化祭で何をやりたいか決めていくために意見が必要です。それぞれ好きに発言して下さい」

そのリリ姉の言葉でみんなが次々に手を上げた

「はい！虎太郎君」

「もちろんメイド喫茶だろ！！！」

「バカに発言権はなし」

「葉露君早く書いて下さい」

「この意見候補に入れちゃうの！？」

仕方なく僕はチョークを折るぐらいの力で候補の横にメイド喫茶と書いた。

何となく予想はしていたけどこの教室の生徒がまともな意見を出してくるはずがない

先行きが不安になってきた

「はいはいはいにやつ！」

ピョンピョン元気に飛び回っているのはたつみ ちとせ巽千歳

頭にネコ耳カチューシャをつけてぶりっ子している女の子だ。そして天才である

「はい千歳ちゃん」

「ちーちゃんはメイド秋峰葉露喫茶がいいにゃ！」

「それは完全にお前がみたいだけだろうが！」

文化祭はみんな楽しんで為の物のはずなのにそんな誰得な物を見た  
いか

「葉露君早く書いて下さい」

「これも候補に入れるの!？」

僕は、非難の目を先生に向けた。

目をそらしてやがる!くそっそれでも教師か!

「はろちん早く書くにゃー」

「うるさい!」

「葉露君!」

「くっ!」

リリ姉に言われては仕方ないので震える手でチョコレートを握りメイド  
秋峰葉露喫茶と書いた。

いかん、状況が悪くなる一方だ

「委員長残り意見一つにしてくださいませんか!」

僕はリリ姉に祈るように懇願した

「何故ですか葉露君」

「これ以上続けてもアホ意見しか飛びださないの!」

「それはダメです葉露君!みんなの意見をちゃんと取り入れなき  
や最高の文化祭にはなりませんよ!」

ダメだリリ姉は真面目過ぎる。

結局僕の意見は通らず会議は進められていった。

「椎名真冬サイン会」

「椎名真冬と王様ゲーム」

それ完璧にお前らの願望だろうが!



そんな感じで出し物が決まりました。

夜、リリ姉に今日の事を聞いてみる事にした。

「なありり姉」

「何ですか葉露君？歯を磨いている時に話しちゃダメだよ？」

現在二人して寝る前に歯を磨いている最中。今日もピンクの寝間着に着替えて、少し眠そうなりり姉が可愛い。

「リリ姉は、良かったの？出し物の意見とか全く言っていなかったけど」

クラスでただ一人発言をしていなかった事に気がついて僕は聞いてみた。リリ姉にもやりたい事あったんじゃないか、そんな気がして「うーん、私は良いんだよ。みんなが楽しめればそれで」

「お人好し」

「だね」

そう言ってリリ姉が歯を磨きおわり先に立ち去っていく。

僕は特に止める理由がなく、鏡ごしに見えるリリ姉の姿を黙って見ている。

「あつ…」

リリ姉が立ち止まりこちらを向いた。

「ん…？」

僕は、振り向かずただりり姉を鏡ごしに見つめた。

「楽しい忘れられない文化祭にしようね葉露君！」

ニコッと笑いながらリリ姉は言い、身をひるがせその場を去った。

「そうだね。一生忘れられない文化祭に…」

そろそろ、僕も

僕は鏡の自分を見てそう心に誓った

### 3話 巽千歳

あだ名がいつの間にか決まっているって事はよくある事だ。

僕は秋峰葉露でアキバ、千歳はチート、椎名は…椎名か。

国立凛々は、委員長でありリリ姉。

昔は凛々って呼べてた気がするのに、本当にいつの間にもリリ姉になっ  
っちゃったんだろうね。姉さん

季節は既に秋、少し肌寒くなり制服も冬服に変わった。

「寒いですね葉露君」

寒さから頬を赤くして委員長は言った。

「そうだね。委員長的には良かったんじゃないの？暑い方が嫌だった  
たでしょ？」

「うん」

お互いにマフラーを首に巻き、顔半分まで埋めていた。色はお揃いで  
白色だ

恋人みたいで何か恥ずかしい。恋人じゃないんだけどね。

うん

「葉露君はちゃんと勉強してますか？もうすぐ期末テストもありま  
すが」

「あー全然してない」

最近、リリ姉のせいで大忙しだったせいで全く勉強に身が入らな  
かった。

一応、机に向かい合わせるけど集中しなきゃやっても無駄なのは分か  
っているからやらずに終わる。

「手伝つてあげましょうか」

「いや、いいよ」

即答で答えた。委員長に勉強を教えてもらうのはなんか自分が許さない。ちよつと意固地になっているのかも知れない

だとすると頼れる奴は…あいつしかいない訳で

「やつほー！はろちんおはおはー！いいんちよもおはおはー！」

「おはおはー」

委員長が覇気のない挨拶をする。

「……………」

巽千歳。チート、その名の通りなんか完璧人orぶりっ子orカチユーシャ猫耳or巨乳

いやこれはやつぱりないだろう。チートに勉強を教えてもらうつていうかまともに教えてくれる保証が全くない

「んー？どしたのかにやはろちん…」

チートが軽やかなスキップで僕に近づいてくる

「ちよつといいか…」

ガシツとチートの腕を掴み廊下に連れ出す。委員長の前では聞かれたくない

「にやつ！遂にはろちんが愛の告白を

」

「しねー！ーよ！ー！！！」

委員長の前で紛らわしい事を言わないでほしい！只でさえ今ちよつと不安定な関係なのに

僕はチートを廊下の隅に連れていき肩を掴む。

「わ、分かったにやはろちん…覚悟決めるにや…」

チートはゆつくりと目を瞑りその体制のまま静止した。

「お前分かっててやつてるだろ」

「んふふー」

目を瞑りながらチートが維持悪く笑った。怖い

「あのさ、千歳。勉強教えてくれないか？その、期末ヤバいんだよ」  
少し目を横に反らしながらチートに言った。

何となく頼む時は人の目を見づらい

「期末？はろちんそんなに勉強出来なかったかにゃ？」

「いや、そういう訳じゃないけど今回に限ってはね…」

「んー別にいいにゃ！はろちんのお勉強会楽しみにしてる」

「サンキユ」

快く引き受けてくれたチートに軽く頭を下げた。こっ見えて器が大きいチートが頼もしく見えた

その時だけは

教室にチートと戻り自分の席につくと委員長が近づいてきた。

「葉露君？何してたんですか？」

「ちよつとね…」

勉強教えてもらうなんて死んでも言いたくない

「そうですか」

委員長がちよつと沈んだ顔をした気がしたけど気のせいだろう。

ふと隣を見ると椎名がいつの間にか来ていた。

存在感ないなーこいつ。

椎名はいつも通り目をランランと輝かしてゲームに勤しんでいた。

期末大丈夫なんだろうかこいつ……………

#### 4話 いつもの関係にサヨナラを

僕は家に帰るやいなやすぐに机に向かった。このままじゃまずいそう確信していたからだ

チートとの勉強会（一方的に教えてもらう）は休みの日に決まった。

「って言っても家に帰るとどうもねー」

椅子にもたれて、ため息をつく。

「葉露君ちゃんと勉強…あっごめんね」

「これだもんなー…」

「ノックぐらいしようより姉。いやマジで」

僕は振り向いて扉から顔を半分出しているリリ姉に言った。

「お風呂沸いてるよ葉露君」

「寝る時に入るからいいよ」

「ダメだよ葉露君！今入らなきゃ」

「イタズラしたいだけだろあんたは！」

最近、僕も学習した。バスタオルであーだこーだの無駄な時間に費やしてはられない

「リリ姉こそ勉強大丈夫なの？」

「勉強より葉露君が心配だよ」

「そーかそーか」

話を打ち切った。

「勉強頑張ってね葉露君」

そう言い残してリリ姉は自分の部屋に戻って行った。

「やる気なくした」

頭をぐしゃぐしゃとかきむしる。

ダメだこんなんじゃ

毎日を無駄に過ごすな。逆転を狙え

行動しなきゃ何も始まらない

「だっけか姉さん」

日頃、口を酸っぱくする程に言われたなあー

「僕にも出来るよね」

僕は、椅子から勢いよく立ち上がり扉を勢いよく開けた。

そして、隣のリリ姉の部屋を自分で言った忠告を無視しノックをせ  
ずに開けた。

「リリ姉」

「えっ？葉露君」

目の前には、机に座っているリリ姉がいた。机の上には教科書とノ  
ート

「何だかんだで勉強してるんだねやっぱり」

一つの事にしか集中出来ない僕とは大違いだよ本当に

「ノックを」

「するのが面倒くさい程にすぐに大事な話があった」

自分の気持ちが悪む前に、弱気な自分が全面に出してしまう前に  
結果を恐れず、いつもの毎日にサヨナラをしたい。

「な、なに葉露君？」

いつもと様子が違う僕にリリ姉はたじろいでいた。

「リリ姉が僕の事をどう思っているのかを聞きたい」

「えっ…そんなの大事な」

「弟？」

「……………うん。」

そうじゃない。そうじゃないんだ。

「僕はリリ姉が好きだ」

「は、はい!？」

「いや、姉としてじゃなくて女の子として」

そう告げた瞬間全てが止まったんじゃないかと思った。一秒がもの  
凄く長く感じるぐらいに

「え、その、あれ、違う、わた、私は  
「  
リリ姉は、何度も言葉を出そうと頑張っているが声の機能が失われ  
た様に口をつぐんだ。

「わ、たしは…う…うわああああん!!!」  
「  
リリ姉はしばらく唇を噛みしめていたが遂に目から涙を流し泣いて  
しまった

そんな姿に僕は焦る。

「リ、リリ姉。ご、ごめん！いきなり過ぎたよね！ごめんなさい！」  
「うわああああん!!!」

それでもリリ姉の涙は止まらない  
そんなリリ姉を見て僕は後悔した

こういう結末を望んだ訳じゃないのに

「リリ姉！」

僕はリリ姉の頭を撫でようとした。少しは落ち着くんじゃないかそ  
う思っ

ただどリリ姉は

「!?!」

手を振り払って拒絶した。

「リ…リ…姉」

今の行動に僕はショックを受けた。

リリ姉に拒絶されるのは初めてで、そもそも泣かせてしまった事な  
んか

僕の行動は間違っていたんだろうか。今まで築き上げてきた物が全  
て壊れてしまった気がした。

今までの関係を崩すって事は間違っていたんだろうか。だけど崩さ  
なければいつまでも僕は前に進めないと思った。

バカらしい。進めない自分がバカらしくてしょうがなかった。  
だけど目を腫らして泣いたり姉を目の前で見て間違っているんじゃないか、そう思った。

いつまでも泣き止まないリリ姉を前にして僕が出来る事は情けない事に見つめ続けるだけだった。

## 5話 狂ってしまった歯車

「叶わない思いなら芽生えなきゃ良かった」

場所は教室。窓からは夕焼けの日射しが漏れていて、周りには既に誰の姿もなく椎名と僕が椅子に座って向き合い僕は零れた涙を拭いていた。

「そんな事ないですよ・・・人は、そうやって成長していくんだと思います」

山程出来た文化祭のしおりを綺麗に重ねながら椎名は言った

「ちよつと、僕は甘く見ていたのかも知れない・・・」

よくドラマとかで『訳ありな主人公』とか『高すぎる異性の壁』だとか僕と微妙に心境が似ている物を夢中で見ていた

最後はいつもハッピーエンド

今思えばあれは慰めだったのかな

「この物語はフィクションですって・・・文字は嫌いだ」

拭つても拭つても涙が止まらない。椎名から目を背けるように僕は窓側に体を向けた。

「想いは消せますか・・・？もう、後悔しませんか・・・？」

後ろから聞こえる椎名の声に僕は答える。

「消すなんてでき、ない・・・」

リリ姉は小さい頃から好きで僕はどうしてもリリ姉が諦められない。姉でありかけがえのない代わりのいない存在で。

両手で顔を覆い、机に肘をついた。

「真冬に出来る事があるなら・・・」

コツコツと僕に近づいてくる椎名の心配がした。

「もう・・・充分過ぎるよ・・・ありがと椎名・・・」

背中に柔らかく温かな物が僕を包みこんだ。  
椎名が僕の首に手を回して抱きしめてきた。

「辛かったら背負い込まず、全部出しちゃうのが正しいんです・・・」

「真冬は小さい頃に言いたい事が言えずにお姉ちゃんに頼ってばかりいたら、男の人が苦手になっていました」

僕に聞こえるか聞こえないかぐらいの声で椎名は言った。

「真冬には詳しくは分かりません。秋峰君の行動は早すぎたかもしれません・・・間違っではいませんかよ」

その言葉が少し僕の心を楽にしてくれた。

「はぁ・・・」

何度目かも分からないため息をつきながら僕は学校に向かっている。  
昨日は、結局一睡も出来ずに今日を迎えてしまった。

リリ姉は起きた時にはもういなかった。

泣き止まなかったリリ姉の部屋を出て僕も昨日は部屋に閉じ籠り色んな事を考えていた。

「これからリリ姉とどうしよう」

正直どうしようもない。先の事を考えるだけで心は沈む。

「はるちん！」

後ろから声が聞こえて振り返ってみると、テツテツと軽く走ってくるチートの姿があった。

「よっ・・・」

「んゝはるちん元気ないにゃ。どうかしたのかにゃ？」

「何でもないよ。ただ昨日徹夜しただけだから」

横に追い付いてきたチートが僕の顔を覗き込んできた。



**6話 放課後（前書き）**

5話冒頭の前のシーンもあります

## 6話 放課後

昔、こんな事があった。

僕がまだ小学校に入る前にいつも通り公園で凧々と遊んでいた時の事だ。

「ねー。葉露君」

「んー？何？」

僕はブランコをこぎ、その目の前の手すりには凧々が座っていた。

「今日ね、好きって言われたの」

「えっ？」

伏し目がちに凧々が言った言葉に、僕は目を見開いた。

「でも、好きってよく分かんないよね。どうなったら好きって事になるのかな？」

上目遣いで僕に質問をしてくる凧々に言った。

「顔がポーってなったり一緒に遊んで楽しかったりとかした時じゃないかな」

まだ、恋愛のれの字も知らなかった僕は曖昧に応答していた。

「ふーん・・・なんか難しい」

そう言つて凧々は、足を交互にパタパタさせて黙り込んだ。

僕も特に言うことはなく無言でブランコをこいだ。

暫くして、凧々は言った。

「うーん・・・その好きって言つのはよく分からないけど、一緒に遊

んで一番楽しいのは葉露君だから私は葉露君が一番好きなのかな？」

「ふぶっ！」

いきなりの告白に吹き出してしまった。

「うん、きつとそうだよ！私は葉露君が好き」

無垢な笑顔を僕に向けて言う凧々に僕も答えた。

「ぼ、僕も凧々と遊んでるのが一番楽しいよ」

「じゃあどつちも好き？」

「うん・・・」

横を向き目を反らしながら素っ気なく僕は答えた  
そんな懐かしい日々

「はっ・・・」

いつの間にか寝てしまったみたいだ。

昨日寝そびれたせいだな。

今は授業中で僕はいつの間にか寝てしまっていた。幸い教師にはバ  
していないみたいだ。

「（あつたなー。そんな事）」

先ほどの夢を思いだし僕は思った。

姉さんが亡くなってから色々な事が変わってしまった。

一番大きな問題は僕とリリ姉の関係で、時が経つに連れて酷くなっ  
ている気がする。

いや、正確には僕の方がリリ姉から離れて言っていた気がした。

だから僕は踏み込んでみたがそれは間違いだつたみたいで、関係を  
変えるという事は良い事もあれば悪い事もある。

僕は良い事ばかりを考えていて、こういう状況など全く想定もして  
いなかった。

「はぁ・・・」

誰に向けてため息をついた訳でもなく時間はただひたすら過ぎてい  
きあつという間に放課後になってしまった。

終わりのチャイムがなり、皆が次々と帰路に着く中僕は立ち上がる  
気力はなくただ見送った。

気がつくと教室で一人になっていた。

「家・・・帰りづらいよなあ」

そんな理由から、僕は図書室に向かいなるべく帰るのを遅くする事

にした。

しばらく、本を読み時計を見ると針は6時半を差していた。そろそろ不味いか。図書館は、卒業が近い学生の為にこの時期は7時まで開いていてそれが僕にはいつも以上にありがたく感じる。鞆を持ち、図書室を後にした。

学校には生徒は疎らで外を見ると部活に入っている生徒が走っているのが見えた。

「おっと！忘れ物だ」

机の中に、忘れ物をしたのに気付く僕は教室の方向に向かった。

教室に向かう途中に空き教室から何か音が聞こえてきた。

この空き教室は滅多に生徒が使う事はなく、僕は不思議に思って立ち止まった。

「先生かな？」

そつと扉に手をかけ開けてみた。

ガラッと扉を開け学校独特な音が響く。

周りには机が丸の形になっていて、その机の上にはいくつも紙が置かれていた。

その、周りを行ったり来たりして忙しそうにしている姿は

「椎名？何やってんだ？」

「ふえ？あ、アキバ君？アキバ君こそこんな夜遅くまで、な、何を・  
・？」

途中まで重ねていた紙を両手に持った状態で椎名が聞いてくる。

「ぼ、僕は忘れ物があつて学校に戻ってきたところだよ」  
嘘だけ。

「か、鞆も持ってですか？」

「家に帰る途中で気づいたんだよ」

嘘だけ。

「ところでさ、椎名は何をしてるんだ？紙集めて・・・」

「真冬は、生徒会の仕事をしているところでした」

「あー。こんな遅くまでご苦労様って・・・椎名一人？普通は他にも誰かとやるよな？こんな時間かかる仕事」

少し離れたところにはかなり溜まった紙があり長く作業をやっているのが分かる。

「今、先生もいたんですけど用事で抜けていて生徒会の皆さんも他にやる事があつて真冬が一人やっていました」

そういう事か。そういう事ならちよūdいいや。

「じゃあ、僕も手伝うよ」

「え・・・!？」

何やら目を見開いて僕を見る椎名にしかめ面をする。

「何だよ？不満か？」

「い、いえとつても嬉しいのですがアキバ君ともあるうものが手伝ってくれるなんて」

「ちよつと待て！椎名の僕に対する認識ってどうなってるの？」

「ナマケモノ」

「おい、どういう意味だ」

そんなこんなで戯れ言はさておき、椎名の仕事を手伝う事にする。

「これ、なに？」

紙をとりあえず順番通りに、折り重ねながら椎名に聞いてみる。

「文化祭のしおりです。今年は来客が多くて、更に量が多いみたいで」

あははと苦笑いをする椎名に僕も笑う。

「椎名、ちよつと休んでていいよ。顔色悪いぞ」

「あはは。ありがとです」

「ったく。一人でやらないで誰かに頼めば良かったのに」

「他の人達も今は忙しい時期なので、いはずらくて」

椎名はそう言いながら近くの席に座り一息ついた。

「アキバ君はどういった用事でこんな遅くまで？」

「家に帰るのが嫌だからだよ」

言った瞬間にしまったと思っただが万事休す。僕は忘れ物をしている事になっていたのに。

振り向くと椎名が勝ち誇った顔で僕を見ていた。

「カマかけました」

「お前・・・」僕が仕事をしている隙を狙ってさりげなく聞いてきた事に脱帽する。

「明らかにアキバ君おかしかったですし。」

含み笑いで、答える椎名を見ていると何だか負けた気分になった気がするので横を向く。

「悪かったな。嘘だよ」

「それはいいですよ。だけど何で帰りたくないんですか？確かいいんちよさんもいるんですよ？」

「それが原因でさ、僕が余計な言葉を口走ったせいで今凄いアレな状況で」

僕は仕事を一時中断して近くの席に座り、椎名と向き合う。

いや、もういつか。だいたい分かってそうだし

「実はそのいいんちよに告白したんだよ」

その言葉にわっと小さな悲鳴を椎名があげた。

僕は言葉を続ける

「うん。結果は惨敗であげくの果てに泣かしちゃってさ、その時に思っただよ」

僕は、言葉が止まらずに椎名に洗いざらいぶちまけた。

間違っていない。その椎名の言葉が僕を軽くした。

「ありがとうな椎名」

何度めかも分からない感謝を椎名に呟く。

「良いんですよ・・・」



## 7話 大切なものいつでも側にある訳ではない

「大切なものはすぐ側にあるものなのよ！」

会長がいつものように小さな胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。

「確かに俺にとって会長さんは大切な存在ですが」

そう言うとき会長は頬を赤く染めて

「恥ずかしい台詞禁止！杉崎には飛び降りる刑を命じます！」

「いやいやいや……」

まさかの死ね宣言をくらってショックを受けた俺は右隣に座る深夏に助けをすぎる目を向けた。

「まあ、そりゃあある人はあるんじゃないかねえの？あたしもそうだけど」

「ま、まさか深夏……そんなに俺の事を！」

深夏の言葉に感激し、俺は涙を流しながら深夏に抱きつこうとした。

「とりゃ！お前じゃねえよ！」

蹴られた。暴力反対

「私の大切なもの……ねえ……莫大な情報かしら」

俺の対面の席に座る千弦さんが、頬に手をあて何やら怪しげな顔をしながら言った。

発言したら返答が怖いので千弦さんの発言はスルーして俺は会長に再び顔を向けた。

「会長の大切なものは言わなくても分かりますよ。お菓子でしょ？」  
そう言ってみると会長はぷくつと頬を膨らませた。

「失礼だよ杉崎！ジューズだって大切だよ！」

「あああ！！アカちゃん！」

会長の可愛さに我慢の限界を向かえた千弦さんが会長に抱きついた。

「ふにゃっ！ち、ちづるう！苦しいよお」

「ごめんねアカちゃん。お詫びに私がお菓子買ってあげるから」

「えっ？本当に！？わーい」

「千弦さん餌付けは程々にして下さい」

このままではいずれ千弦さんが犯罪を起こしそうなので止めておく事にした。

「まあ、大切なものって言うっても結局あれですね。すぐには出てこないです」

「確かに、な。」

深夏が苦笑して俺に同調した。

そしてさっきから気になっていたけど真冬ちゃんが全く喋っていない。

調子でも悪いのかな？と俺はあえて真冬ちゃんに配慮してふらなかつたけどどうもそうでもないらしかった。

何か上の空な気がする。真冬ちゃんはポケットとした顔をして、長テールブルをじつと見ていた。

遂に我慢出来なくなり俺は真冬ちゃんに話をふってみる事にした。

「真冬ちゃんは、大切なものってあるかな？」

「……はふう。」

「まーふーゆちゃん！」

「ふ、ふえ？ど、どうかしましたか先輩！？」

真冬ちゃんは、パタパタと両手を上下に振りながら俺を見ている。

「だから真冬ちゃんの大切なものってなにかな？って」

「た、大切なもの？そ、そうですね！げ、ゲームとかですかね！」

「やっぱりね」

予想していた台詞がそのままできたので俺は笑ってしまった。

「真冬は昨日帰って来てからずっとこんな感じだぞ？上の空っつか。まあいつもと変わらないんだけどさ」

昨日から？ふむ……何かあったのかな？

「真冬ちゃん昨日何か」

「な、にやにもないですよ！」

完璧に何かあった慌てかたで目を反らす真冬ちゃんを俺はジト目で見つめた。

「ま、まさかNTR！お、俺NTR耐性ないんだって！」

驚愕する俺を深夏が軽く叩いた。

「ま、まあいいじゃないですか！会議中ですよ先輩！脱線はメツ！です」

脱線も何も生徒会が脱線しなかった事なんて今まで一度も無かったと思う。

「あつそういえばさつきりりシアが踊りながら自分の部室に入って行ってたよ！あれはまた生徒会の弱みを握った感じだったよ」

会長がしかめっ面で、言った

藤堂りりシアは碧陽学園の新聞部部长であり生徒会の最大の敵となっていた。

まあ俺からすれば厄介な存在で、飛鳥と林檎の関係もすっぱぬかれた過去がある。

「お、俺はもう何も疚しい事はないですからね！」

皆が俺をジト目で見ていたので俺は大声をあげて反論した。

「まあいざとなれば私の組織の総力を挙げて潰せるわよ？」

にっこりと千弦さんは恐ろしい事を言う。

「だから変な設定を作らないで下さい！」

「あら設定じゃないわよ？事実よ」

「余計に嫌です！今のは無かった事にして下さい」

そんな感じでいつも通り会議は脱線していき、真冬ちゃんという結局調子変わらず所々で上の空でため息もついていた。

「疲れた！お腹空いたから会議終了！またあーしーた！」

「今日も完全無欠の自己中発言で会議終わらせましたね！」

まあ、会長が自分勝手な理由で会議を終わらせるのはいつもな事な

ので誰も批判する者はいなかった。

生徒会メンバーが先に帰り、日が沈みかけの中俺はいつも通り残って生徒会の書類をこなす。

「真冬ちゃんどうしたんだろうなあ・・・」

書類を読み上げている最中にふと気になった。

ハーレムを指しているのに彼女の気持ちも汲み取れないなんて情けないと反省

それからまた30分が経ち、いよいよ仕事も大詰めにかかっていた。その時、ガラガラつと勢いよく生徒会室の扉が開き来客の存在を知らせる

扉の方を向くと、金髪をかきあげて息を切らしながら笑っている藤堂リリシアの姿を確認する。

「あら？あなた一人ですか？はあ・・・つまらないですわね！せっかく新聞が出来上がったというのに」

「その様子からして生徒会関連の記事のようですね」

「ハハハと答えた俺にリリシアさんは高飛車に笑って言った。

「その通りですわ杉崎鍵！またまた憎き生徒会の弱みをゲットしましたのよ」

「それで何ですか？見せる為に来たんですよね？」

俺もこの後にバイトが待っていたので答えを急がせるように聞いてみる。

「とくにご覧なさい！明日は学園中がパニックになりますわ！」

そう言って丸めていた紙をバツと広げ記事の全文を露にした。

『あの椎名真冬に彼氏疑惑！！』

その衝撃的な文字に俺は目を丸くし、記事の真ん中にある写真に目を向けた

写真は真冬ちゃんが見知らぬ少年を後ろから抱きしめている

写真だった……

「は？」

## 8話 発見

朝、いつもの様にリリ姉の姿はなかった。

「また先に行っちゃったか」

朝から深いため息を付きながら支度をし、家を出た。

大分寝ていて始業時間まで残りすくなかったので僕は小走りで学校へ向かった。

学校の下駄箱まで来てみると何やら人がザワツイテ何かに群がっているのを発見する。

「何だろ？あー、時々貼られる新聞部の号外って奴か」

新聞部は確か今の生徒会とは犬猿の仲らしく大体は内容が生徒会の悪口やら何やらが書かれている事が多い。

「さて、今回は生徒会が何をやらかし・・・」

新聞をチラッと遠目から確認して見ると新聞の中心に写真がプリントされていた。それが何か、っていうか僕が映っていた気がし言葉を飲みこんだ。

群がっている生徒に気づかれない様に、ゆっくりと新聞に近づいていきやつとの事で一部分だけ読み取る事が出来た。

タイトルは『生徒会の椎名真冬に熱愛疑惑！？』

そして、写真は僕が椎名に後ろから抱きしめられている写真

僕は、本能的にその部分だけ確認すると反対方向へ走り出した。

何で？誰かに見られていた？新聞部？あの時間にそれもピンポイントで見られていたって訳かよ。

冷や汗を垂らし僕はとりあえず人気の少ない屋上に向かう。

屋上の扉は開いていない為、途中の階段に座り込む。

息を切らしながら事態を整理してみた。

恐らくクラスの奴らは全員見ている。

全員椎名ファン

もちろん椎名もこの事は知っている

そして、リリ姉にもバれているに違いない。

「うわあああああああああ」

頭をかきむしり、対策を考えては見るがパニック状態の今考える事はほぼ不可能だ。

「行くしかない、よなあ・・・」

誤解な筈なのに誤解では無いのがめんどくさい。椎名に抱きしめられていたのは事実な訳だから

そうしている内にチャイムがなってしまった。

「一限目は仕方ないか」

僕は一限の授業は諦めて、二限からの授業から教室に戻る事にした

筈なのに

「姉さん、結局昼食時間になってしまったよ」

やっぱり後回しってダメだね！だって絶対にその後も後回しになるに決まってるし

「とりあえず、昼食時間だから一階とかは行っても大丈夫だよね」

階段から腰を上げ僕はそつと一階に降りる

「つと！」

ポケットから振動がする。メールだ

件 葉露君

題 大丈夫？今こっちは大変で

というメールが届いた。

「リリ姉！」

僕は教室に走った。リリ姉が困っているのは間違いなく僕のせいだ。クラスの奴らに殴られようが知った事か！もう事実を話すしか方法はない訳だし出た所勝負だ！

二階まで一気に階段を駆けおりて、教室に向かう。

「あー！ちよつと！きみ！きみい！」

いきなり後ろから声がして僕は足を止め振り返る。

「やっぱり写真の子だ！いやービックリしたよー！あの真冬ちゃんに彼氏なんて！杉崎がもう死にそうな顔しちゃってさ」

振り返ると小学生ぐらいの容姿で……っていうかどう見ても小学生の女の子が僕を指差していた。

何だ？何だ？このちびっ子は？いきなりフレンドリーに語りかけてきたけど

椎名を知ってる？って事は同級生かな？いやこんな子見た事ないぞ。でもこの人どっかで……

「立ち話は何だしちよつとこつち来て」

女の子はそういうと、僕の手首を掴んで引っ張っていく。

「ちよつ！リリ姉ー！」

叫び虚しく僕は見知らぬ少女に連れていかれるのであった。

## 9話 どうもしくなくていいんじゃないかな？

「んで、あの写真はどついう訳なのよ」

小さい女の子が対面に座ってポツキーを食べながら、興味津々な感じで聞いてきた。

「どつっていいましようか？つまり、まあ、あれは事故みたいなもんです」

僕は思った事を口に出してみた。事実だし

「ふむふむ、だけど男嫌いの真冬ちゃんがあーゆー行動を起こすつていうのは・・・君！相当な物だよ」

ピシッと僕を指差し小さい女の子は宣言した。

「いや、でも僕は別に椎名と仲が良いわけではないですよ」

実際は隣の席だからちよくちよく話すだけの関係だし

「いやいや、でもっ・・・ってどうか君の名前なんだっけ？」

何故、僕達は互いの名前も知らない間柄なのにプライベートな事を話していたのだろうか。

「秋峰葉露です。一年です。そつちは」

そう言つと女の子はフンと偉そつな感じで鼻を鳴らし告げた。

「私はこの碧陽学園の生徒会長の桜野くりむなのだよ！因みに二年生！」

「せ、先輩でしたか」

やっぱり何処かで見たと事あるなと思つたら、4月に生徒会長の宣言で泣き出した人じゃないか。余りに印象深かつたから何となく思ひだした

「フッフ、後輩よ。敬え、敬え」

ご満悦な表情をしている桜野先輩を見てさつき廊下で言われた不吉な一言を思ひだした

「あ、あのちよつといいですか？」

「何だね。何だね。可愛い後輩には何でも話してあげましょう」  
変なテンションなのは放って置いて、聞いてみた。

「さつき、言ってたあの、杉崎先輩がどーのつていうのは？」

「あー、はいはい、あれはね」

桜野先輩はハアーと呆れた様にため息をつき片手で頭をポンっと叩きながら言った。

「あの変態はねバカだからハーレム目指してる訳なのよ」

「あつそれは知ってます。僕一応ファンなんで」

僕の目標は杉崎先輩でハーレムは僕には無理だけど杉崎先輩のひた向きに目標に向かって頑張っている姿勢が好きだ。

それを聞くと桜野先輩がちよつと引いた感じに片方の口をつり上げてアハハと笑った。「そ、それでねつまり真冬ちゃんと君が付き合ってるんじゃないかと普通は思うでしょ？新聞見たら」

「確かに普通の人ならそう思いますね」

大変、侵害ですが。

「今日杉崎とさつきすれ違ったらもう凄い淀んでる感じだったよ！あれは杉崎が一年の時と同じ状態だねー」

上を見ながらポッキーをつまみ思い返すように桜野先輩が言った。

「一年の時って・・・？杉崎先輩前もそんな状態になってたんですか？」

「うん。理由は分からないけどね。そんな感じだったよ」

「そんな・・・」

事の重大さに気付き僕は、机に崩れるように突っ伏した  
憧れの先輩が死にそんな思いをしている原因を作ったのが僕って事か。

「僕どうしたらいいと思えますか・・・？」

すぎる様に桜野先輩に助けを求める。

そして桜野先輩は平坦な声で

「どうもしなくていいんじゃないかな？このまま何も無かつたら記憶からは消えていく筈だし、だいたい杉崎もあれだよ！ハーレムだなんだって！一人にちゃんと決め・ブツブツ」

桜野先輩は途中から声を落として何かをブツブツ呟いていた。

「そんなもんですかね？」

「そんなもんだよ！あつ！良く出来たコラ画像だなつ！とか言えばいいんじゃないかな」

グッドアイデアと言う感じでパアっと目に輝きを放つ桜野先輩に少しドキつとしてしまった。やっぱり、容姿で生徒会に選ばれただけあつて可愛い。

「分かりました。クラスの連中にはそう言っておきます。ただ・・・

「ただ？」

二袋目のポツキーを開けながら桜野先輩が聞いてくる。

「つていうか昼食にポツキー？」

食堂には、パンなどを買っていく生徒こそいたものの食堂で食べて行こうという生徒はいないみたいで座っている生徒は疎らだ。

僕と桜野先輩が対で座ってる光景ってどう思われているんだろうか？今さらながらに思った。写真を撮られたばかりでこれってちょっと無防備？

「いや、何でもありません」

クラスの奴らにはそう誤魔化せるけど、リリ姉に嘘を付きたくないというプライドが邪魔をしていた。

「あの、ありがとうございます。桜野先輩」

僕は素直に頭を下げ礼を言った。

「いーよ。生徒会長だもん」

ニカツと笑いながら小さい生徒会長は自信満々に告げた。

頼りにならなそうな容姿をして実は頼りになる桜野先輩が僕には眩

しかった。

「さて、と、じゃあ覚悟決めていこう」

桜野先輩に戻り際にまた礼を言い僕達は別れた。

階段を上がる最中にすれ違う生徒達が僕を見てこそこそ耳打ちをしていたり指をさしていたりしてたけど気にせず自分のクラスへと駆け足で向かった。

目の前まで来て深呼吸をした。

「大丈夫！大丈夫。ここは大丈夫」

問題はクラスメートよりリリ姉と椎名。

ここが始まりじゃない。まだ始まりは先にあるドンと胸を叩き振り向いて僕は扉に手をかけた。

扉を勢いよく開けると待つてましたとばかりに何故かコピーされていた新聞の写真を指差して質問責めをしてくる

たじろぎながらも僕は桜野先輩のアドバイス通りにクールを装い告げた。

「よく出来たコラ画像だな」

因みに椎名は苦笑いしながら僕に手を振って对象的にリリ姉は本を壁にし僕を見てはいなかった。

10話 The desire is confirmed

「まつ、チキンの秋峰君がそんな事になる訳ないっしょ！」

虎太郎が満面の笑みをしながら新聞を丸めて、ゴミ箱に投げ入れた。

「だよなー秋峰だしなー」

「最初から俺は言ってたじゃん！椎名さんは杉崎鍵でしょ」

「普通に考えれば分かった事だよな」

「ってかそれなら俺達もダメじゃね？」

「グハッ！」「」

バカなクラスメート達が勝手に何かを言いながら勝手に苦しんでいるが僕は気にせず自分の席に向かった。

というか何だろう。上手く誤魔化せたのにこの敗北感割に合わない……

席に行く途中に急に体が僕に刃向かった。いや、袖の辺りを後ろから誰かに摘ままれていた。

「ん？誰？」

振り返ってみると委員長が指で僕の袖を摘まんでちよいちよい引いていた。

「リリ姉……じゃなかった。委員長どうしたの？」

相手が相手だけに僕は目を見開いてドキマギしながら言った。

委員長と話すのは告白以来でましてや新聞騒動の直後なものもあって非常に気まずい。だから目を自然に反らしてしまうのも許してもらいたい。

「葉露君。実は話があつて……そのごめんなさい。」

「いや、いいよ。ここじゃあれだし廊下で話そう。」

委員長が椅子から立つのを確認して僕は廊下に足を進めた。

何となく椎名が横目で見ていた気がするけど僕からしたら優先順位

はいつも委員長と決まってる。

廊下の端まで来て、委員長と対面で向き合った。

何か凄い緊張するんですけど・・・！委員長と向き合って話すの何か久しぶりだ。

「あの、ですね。葉露君に返事しなきゃっていつも思ってたんだけど・・・」

委員長がうつ向きながら両手の指をチョンチョンとしながら話しました。

「返事ってやつぱり」

「はい。葉露君に待たせるのもいつまでも返事をしないのもお互いに辛いんじゃないかと思って。」

確かに最近は、無意識に互いを遠慮してそれが日にちが経つにつれて酷くなっていた。

「うん。そうだね。僕もいきなりあんな事言ってさ悪いと思ってる。ごめん」

僕は素直に頭を下げた。

委員長はあたふたして

「べ、別に葉露君が　いや、もうまどろっこしいです！勢

いで言っちゃいます！」

「えっ？まだ心の準備すら　」

そんな僕の言葉も委員長はシャットアウトして口をあける。

「葉露君は私の弟さんなんです。その、亡くなった時から私は葉露君のお姉さんを代わりをしようと思った決断していました。」

言葉を挟もうとしたけど、目を瞑って両手を合わせて必死に自分の気持ちを、言葉を伝えようとしている委員長を見て僕は何も言わなかった。

「でも、葉露君から好きだと言われて、ちょっと、その嬉しくて、

その嬉しさは姉になろうと決めたのに何か矛盾してる。そう思って私には辛くて泣いてしまいました」

「うん」

「葉露君は子供の時に言ってたよね。好きって言うのはその人と一緒にいると楽しくて体がポカポカするって」

「子供の頃の幼い返事だったね」

「葉露君といるのは楽しいです。でもやっぱり好きとかそういう気持ちなのか分からないの。ごめんなさい!」

「うん・・・うん?」

あれ?今、僕振られた?よね・・・

「だから」

あーありり姉に振られちゃったよ姉さん。

「文化祭が終わったらデ、デート・・・しま・・・しよう」

「ごめんなさいりり姉って・・・エエ!?デート??」

振られたんじゃないの僕?

「はい、あの何回も言うのは恥ずかしいのですが、その、気持ち確かめたいんです・・・だめ・・・ですか?」

目に涙を浮かべながら上目遣いで返事を待つ委員長に僕は言った。

「いや、全然、むしろ嬉しい、だから文化祭、終わったら、行くこと緊張してカタコトになってしまったけど僕の思いは伝えられた。」

「はい!それじゃあ楽しみにしてるよ葉露君!」

とびきりな笑顔に向けてくれる委員長を見て僕は思う。

やっぱり椎名の言った通り、告白したのは間違いじゃなかったんだ。鈍い僕だけど、これだけは分かる

りり姉の笑顔は僕にとって最大のエネルギー源だって事

そこでは毎日、生徒達の色んな意味がある想いが交わりあっている。

## 11話 勉強会（チートに教えてもらっただけ）

日付は土曜日、今日は巽との期末に向けての勉強会だ。勉強会と言っても基本は巽に教えてもらっただけの内容

巽千歳本人は全てが基準値を大幅に上回っており、今さら猛勉強をする必要などないからだ。

そのせいか巽は、皆からの妬みも込めて『チート』というあだ名で呼ばれるようになる。本人が気に入っているかは詳細不明

「んじゃ、遊びに行ってくるね」

リリ姉に何処に行くのかしつこく聞かれたけど上手く誤魔化しそそくさと外に出る事に成功した。

巽の家は僕の家からはあまり離れてはいなくて、徒歩5分ぐらいで着く所にある。

依然、僕、リリ姉、巽で帰った時に場所を知った。

「チート、とは言われてるけど家は結構普通なんだよな」

僕は、巽の家の前に着いて見上げながら呟いた。

家は一軒屋で二回建ていわゆる何処にでもある家である。

インターホンを押し、千歳が出てくるのを待つ。

すぐに扉は開いた。

「ヤホヤホー！はるちん」

相変わらずのハイテンションよろしくで満面笑顔を振り撒いている巽に苦笑する。

「よっ。チートっていつも笑ってるけど泣いたりすんの」

「失礼だにやはるちん。ちーちゃんだつて人間さ」

やはり巽でも泣く時はあるらしい。個人的に詳細凄く気になる。プライベートなので聞かないけれど

「まっ、はるちん入りなされにゃ」



部屋の中はピンクで統一されていて、なんとというか男としては今すぐ回れ右してとんずらしたいそんな雰囲気満ちた部屋だ。

「どうかにゃ？はろちん。ちーちゃんの部屋は」

「なんていうか想像通りって感じだな」

カーテン、ベッド、カーペット、テーブル、すべてがピンク色だった。

「あれ？チート学習機とかはないの？」

学生には必需と言える学習機が巽の部屋にはなく疑問に思い聞いてみる。

「んー、ちーちゃんはなんかそういうのかたつ苦しいにゃ。テーブルで勉強したい派」

「ふーん。集中出来るのか？ってチートだから出来るか」

「集中っていうよりちーちゃんは一人でやるよりは、皆で囲んで教科書広げてやれるテーブルのが好きにゃ」

「そんなもんなのか」

さつそくテーブルの近くに座らせてもらい持ってきたバックから教科書とノートを取り出す。

巽も僕の向かい側に座り既に用意していた教科書を開く。

さて、勉強開始

「はろちんは何が苦手なのかにゃ？」

「苦手なのは数学とか歴史かな？覚えるのが苦手でさ何回も書いたり暗記したりするのもめんどい」

「数学は公式の基本さえ覚えれば大丈夫にゃ。それと歴史は範囲を絞ってやるのがアドバイス。全部覚えようとして覚えられるのは一部の人間だけにゃ」

その一部に巽は入っているのか気になったが、何となく聞くのは止めた

「あーそうそう。はろちんいい忘れてたんだけどにゃー」

「んー？」

教科書を開きながら巽が軽い感じと言ってきたので軽く流す感じで僕もシャーペンを弄っていた。それがいけなかった。

「今日のはろちに……泊まって行ってもらいたいんだにゃ」「んー……ほあ？」

片手を頭に寄せエへへと苦笑いする巽に僕はただ驚き目を見開いただけだった。

## 12話 赤嶺一円ルート

「まさかチートにも弱点があったとはね、予想外だったよ」

「べ、別に弱点じゃないにや！」

つまりと簡単と言ってしまったら夜に女子高生一人は危ないからだとか。もっと簡単に言っていると幽霊が怖いみたいだ。

「まさかあんなに乗り気だったのはこういう為だったのか」

「あーなんか疲れちゃったにやー。ゲームでもやるにや」

巽は凶星なのか僕の質問には答えずにテレビの方に向かって行った。

「なら、最初からそう言えよな」

それにしても困ったな・・・リリ姉にどう伝えようか。

『今日、チートの家に泊まるね』

『は、葉露君！エッチです！しかも私に告白してまだ間もないのにもう乗り換えですか！酷いです！葉露君のばかばか！ふえ〜ん！……！』

うん、これは却下だな。下手すればリリ姉が母さんにチクって明日の夕飯に赤飯が並ぶ恐れがある。

「なあ、こんな時だからこそそのチートさん」

「日本語でOKにや。はろちん」

「チートの家に泊まるって事は家に連絡をしなきゃいけない訳だ。

そこでチートの出番なんだけどリリ姉に上手い言い訳を

そんな僕の言葉を遮り巽は

「ああ！それなら心配ないにや。もう委員長には報告済みだにや」

「なあチート。お前を倒す旅に出ようと思うんだがどこかに賢者の剣みたいなのないかな？」

サラリとツツコミをした僕だが凄く動揺している

リリ姉何て言っただよ！OKしちゃったのかよ！僕は明日赤飯な

のかよ！

「はろちん。大丈夫だにや。委員長はOKしてくれたにや」

「失礼だが、何て？」

「『葉露君に首を洗ってまっついていて下さいと伝えて』だつてにや」

その言葉を聞いた直後に僕の手には既に携帯電話が握られており速攻で電話をかけリリ姉に必死に言い訳をした結果

「間一髪だった……。」

「凄かったにや……はろちんの覇気。あれで500人は倒せるにや！」

「元はといえばチートお前が」

文句を言おうとしたけど辞めた。なんか疲れた

これ以上続けても何故か僕が打ち負かされる未来しか見えないのでこの決断は英断と言えようか

「はろちんゲームしようにやゲーム」

「今色々と疲れたから一人でやって下さい」

「闇のゲームやるうにや！はろちん」

「千年のパズルなんて僕持ってないから」

チートがゲームをしている様子を僕は黙々と眺めていた。

「ゲームってギヤルゲじゃねえか！」

「ギヤルゲをバカにするのは許さないにや！」

「あつしかもこのゲーム知ってる。なんか何処にいつてもbad endみたいな後味が悪いエンディングしかないんだよね。僕はあんまり好きじゃない」

チートがやっているギヤルゲは『二人追人！！』っていう物で各ヒロインとのルートは全てあるのだけけど

「僕が一番印象に残ってるのは赤嶺あかみね一円いちえんのルートかなあ」

「最終的に赤嶺一円とは結ばれずに主人公の幼なじみと結ばれるよ

くわからないルートだっけにゃ？赤嶺一円のルートなのによくわからない終わり方だったにゃ」

赤嶺一円ルートは最初は隣の席というだけのクラスメイトだったけど時が経つに連れて親密になっていく。

しかし主人公にはいつも側にいる幼なじみがいて、親密になっていくにつれて赤嶺一円には罪悪感も生まれてくる。

最終的には、赤嶺一円が転校という形で結果的に主人公とは別れてしまう

「って感じだけど、主人公は別れた後に赤嶺一円の存在の大きさに気づいて幼なじみとは結ばれなかつたんだよね」

「あれ？そうだったのかにゃ。流れるに幼なじみと結ばれると思っただけだよ」

「まだ途中だったのか？」

「幼なじみに告白されたところでセーブして止まってるにゃ・・・」

「何故かチートが目を細めて僕を見る」

「な、なんだよ」

「はろちゃんはとうするにゃ？」

「なにが」

「赤嶺一円ルートでもしはろちゃんが主人公だった場合は・・・どうするの？」

「にゃの語尾を忘れる程に真剣に聞いてくる巽に僕はたじろぐ。」

「僕が主人公だったら・・・それは」

「分からないな。そんな状況になった事ないし」

「もうはろちゃんはルートに入っているけどにゃ」

「おい今なんて言った」

「巽は小さい声で何かを呟いてそっぽを向いてから」

「二兎追うものは一兎を得ずだよ。はろちゃん」

「なんだよ？それよく分からないんだけど」

巽の考えている事は天才ゆえに理解が出来ない。いや僕が理解出来ないだけなのか？

「はろちゃんは二兎どころ三兎になる可能性があるかも知れないけどにゃ」

後ろを振り向いて巽はそう言ったが僕にはその言葉はよく理解出来なかった

### 13話 何で早く言わないんだよ！

会話も一区切り付いて、僕は勉強を、巽はゲームをして時間が経っていく。

「はぁ・・・ゲームも飽きたにや。ちよつと横になるにや」

「そんな所で寝ると服汚れるぞ」

さすがにベッドで寝た方がいいんじゃないかと思いついて巽に指摘をする。

「どーせ寝ている間にハ口ちゃんに無理やり脱がされるんだから関係ないにや」

「お前はどーして人の好意を踏みにじるんだらうなあ」

しばらくして巽が静かになったので、僕は教科書を広げモクモクと勉強を続ける。

あれ？これ自分の家でもやっても変わらないんじゃないか？と思ったけど時すでに遅いなので勉強に励む。

しばらくして顔を上げ時計を見ると時刻は7時を経っていた。

「ゲッ・・・もうこんな時間だ。巽っていつもどれぐらいに夕食を食べてるんだ？」

起こすのも可哀想だと思ったけど腹を空かしたままでも勉強に身が入らないので巽を起こす事にした。

「チート！おいチートー！」

声をかけて見るが起きる気配が全くない。

仕方がないのでほっぺを軽く触ってみる。

「おいチート！チー・・・ト」

チートの身体に触れた瞬間に違和感が発生した。ほっぺから額に手を移す。

自分の額にも手を当ててみる。

「チート、お前熱・・・あるんじゃないのか？」

その声に巽が反応した。

「にや・・・遅いにや。ハ口ちゃん・・・何から何までにぶちんさんだ

「にゃ」

「お前起きてたのかよ！バカ！何で早く言わないんだよ！」  
つい声をあらげてしまふ。病人にバカか僕は！

「言ったらハ口ちゃんが来なくなるにゃ。それはハ口ちゃんも困るし・  
・ちーちゃんも困るんだにゃ」

「そんな事・・両親の方には言わなかったのか？熱があるのに気づいたのはいつだよ」

「朝起きた時だにゃ・・でも家族にはデートを楽しんでもらいた  
いんだにゃ・・いつもちーちゃんが迷惑かけてるからにゃ」

巽が何をどう迷惑をかけているのかは今は聞かないが、このまま放  
置しておく訳にもいかない

「チート！ちよつとごめんっ！」

「ふえ・・・きやつ！」

僕は壁に寄りかかっていた巽の背中に片方の手を回しそのままもつ  
片方の手を膝に滑り込ませる。

いわゆるお姫様抱っこって奴だ

「は、放すにゃ！ハ口ちゃん！ちーちゃん恥ずかしくて頭沸騰して死  
んじやうにゃ」

「うるさい！恥ずかしいのは僕も同感だ。だけど恨むなら隠してた  
自分自身を恨めよ」

そのまま巽をベッドに寝かせ布団を被せる  
次は

「チート、保冷剤は？」

冷蔵庫と場所を教えて貰い失礼して冷蔵庫を開けさせてもらふ。  
保冷剤があつたのを確認し、巽の部屋に急ぐ。

自分の持ってきたカバンからタオルを取りだし保冷剤をくるんで巽  
の枕と入れ換えた。

「粥とか食べれるか？」

「ん〜フルーツが食べたい感じだにゃ」

「ちょっと待ってる買ってくる！チート鍵貸して！」  
「はいにゃ」

僕は巽からしつかりと鍵を貰い急いで部屋を

「って重いよ！！何で鍵に1メートルある例のネズミの人形付けてるんだよ！もはや鍵より存在感あつて絶対に紛失しないよ！」

「ハロちん突つ込みが長いにゃ」

「どうでもいいよ！しかもお前さつきは付いてなかったって事は今さつき付けただろ！嫌がらせかよ！」

熱が出て体がダルくても巽のイタズラな性格は治らないらしい  
大変迷惑な話だ。

しかし巽は今は病人という事もあり仕方なく僕は家を出てネズミを籠の中に入れてコンビニに走る

今の僕って凄いバカに見えているんじゃないだろうか？熱が引いたら巽の奴覚えてるよ

全速力で自転車をこぎ、およそ3分程でコンビニに着く。

急いで店内に入りリングとミカンとバナナをカゴに入れてレジに向かう。

ちようど回り角から人がきてもう少しでぶつかりそうになったけどギリギリの所で回避する。

「す、すいません！」

「ご、ごめんなさいです！」

へタレな僕は反射的に頭を下げた。

そして同じく頭を下げた女の子らしき人物に目を向ける。

「って椎名かよ！」

「あ、秋峰君です！」

そこには制服姿の椎名がいた。何で休日に制服を着てるのかは分からないけどおそらく生徒会辺りだろう。

「まあいいやゴメン椎名！僕急いでるんだ！」

「は、はあ。そうですか！・・・あ、秋峰君！」

「え？何さ椎名」

そういえばいつの間にかアキバじゃなくて秋峰君と呼ばれている事に気づく。正直アキバというあだ名は好ましく思っていなかったので大歓迎だ。

「あの〜それ」

椎名がそーつと指差した場所を見るとポケットからはみ出しているなんてもんじゃないネズミの人形があった。

「ああこれ!？」

「確かチートさんのですよね・・・？何で秋峰君が」

そう聞かれた直後僕の心臓がドキッと高鳴る。な、何で知ってんだこいつ

「ちよつと前にチートさんが買ってきたとか自慢していたのを何となく覚えてます・・・しかも確かお家の鍵だったような」

「えー！何の事かなー!?悪い椎名。僕急いでるんだ！また休み明けに会おう!」

「あつ秋峰君!」

呼び止める椎名を無視してレジで会計を済ませ、僕は逃げる様に異の家へと帰った。

## 14話 自分の気持ち

「つまり全て計算済みだった訳だ」

「ん〜ん〜」

「この性悪め！悪魔かお前は」

巽家に帰り鍵を渡しながら笑う巽に僕は悪態をつく。

怒っていい！これは怒っていいよね！？

椎名に巽の家にいた事をクラスメートにバラされたりでもしたら、

僕の学校生活は不毛な物になってしまっただろう。既に不毛とか思っ

ても言わないでねっ！

「いや〜八口ちゃんは相変わらず面白いにや〜 ちーちゃんの癒しにや〜」

「お前には癒しになっても僕はストレスしか感じない」

巽がみかんゼリーを食べながら、気分良さげに言った。

「あ〜ん」

「あ〜ん？」

巽がゼリーをスプーンで一掬いして僕の目の前に差し出してきた。

「何だよ？」

「世話してくれたお礼にや〜」

「別にお礼ありきでした訳じゃないんだけどな」

そう言いながらも僕は素直に口を開け差し出したゼリーを食べた。

うんっ 疲れた時に甘い物は良い。

巽が夕食を取っている間に僕は再び勉強に取りかかる。もう試験まで日も無く一秒一秒が大切になってきて無駄には出来ない。

リリ姉にも意地はつた示しが付かないしね。

「勉強ばっかりしていると頭パンクしちゃうよ八口ちゃん」

「僕はチートみたいになると頭が良くないから」

正直妬んでいるが同時に尊敬もしている。巽も人の見ていないとこ

るでそれなりに努力をしているに決まっているからだ

「ところで八口ちゃん、他に何か隠してないかにはや？」

「チートに隠す事なんか何も無いぞ」

「例えば、ほらいいんちよの事とかにはや」

突如リリ姉の名前が出た事に同様に手に入力を入れすぎてシャープペンの先でノートが破れてしまった。

いかん動揺し過ぎだぞ僕！つてか巽も鋭過ぎるだろ色々！

「お礼で何でも相談に乗るにや！」

うくん・・・リリ姉に告白してから三歩進んで二歩下がる状態を脱したいとはつくづく思っていた。そして巽は間違いなく僕に的を得た回答をしてくれるに違いない。

だけどやっぱり気が引けるなあ・・・椎名には話しちゃったけどこういう事は他人に頼るより自分で解決するべきだと亡き姉さんが言っている気がする。

と、いうわけで僕は巽にもう一つの悩みを相談する事にした。

「いいんちよに関しては別に問題ないんだけど悩みはあるね。お言葉に甘えて言っついていいかな？」

「ドンと来いにや！」

僕はもう一つの悩みの憧れの杉崎先輩の事を打ち明けた。

「実は僕のせいで傷付いてしまった人がいるんだよ。もちろん傷付けてしまった内容は全くの誤解なんだけどさ」

巽は八口ちゃんが人を傷付ける人に見えないけどにやあと呟きまた黙って話を聞いてくれる。

「実はチートに相談する前にも別の人にアドバイスされたんだ。その人はほっとけばいいって言ってくれたけど、僕はそれが状況突破の糸口になるとは領けないっていうか　　納得出来ないんだ」  
「やっぱり当事者が直接会って話した方が絶対に良いし何より僕がそうしたい。」

「相談する時にはもうその人の心の中で答えが出てるとはよく言う

けど八口くんはそれん再現してるにゃあ」

「あつ・・・」

勝ち誇った顔で巽は僕を見つめる。

「八口くんが今思った事を実行すればいいにゃ。結局は決めるのは自分にゃ。後押しならいくらでもするけどにゃ」

「チート、お前」

「後、大体内容も分かってるにゃ。あんな新聞が公の場に出てて、八口くんがまふーときこちないし気づかない方がおかしいにゃ八口くん」

「最初から全部お見通しって訳か。チートにはかなわないな」

僕は床にパタッと倒れて天井を見つめる。

何か悔しいな。巽にすべて見透かされてるみたいで

時刻はもう深夜11時。僕と巽は風呂に入り寝間着に着替えた。

外はスーパ―の明かりも消えて車も数が激減して室内が無音となる僕はテーブルで勉強し、巽は横たわって僕のその様子をジッとみている状況

えーと何だろうねこれ。凄いきまづいんですけど

考えて見れば女の子と同じ部屋に二人きりってかなりヤバイんじゃないだろうかしかももう深夜で、、寝る時間だ、、し

そんな雰囲気を弄ぶ様に巽が口を開いた。

「八口くん、一人じゃ怖いからこっち来てにゃ」

「遠慮しておくよ。僕は他人のベッドは落ち着かないんだ」

「来なきやクラスの全員にTwitterで報告するにゃ（笑）」  
速攻で巽のベッドの近くに移動する。

シャンプーの良い匂いと巽が普段寝ているベッドの匂いがあわさってかなり甘い匂いに心がドキドキする。

「で、どうしたらいいんです、すか」

「何でカタコトなのか分からないけど・・・一緒に寝るにゃ」

「へっ？」

僕が振り向いた直後巽に袖を引つ張られ後ろにひっくり返る形になる。

「なっ、なっ、なっ！なっ！なっ！」

ベッドで巽と向かい合う形になってしまった。すげーヤバイ！心臓も破裂しそうな程に鼓動が激しい。

「やっぱり隣に誰かいるのは落ち着くにや・・・ハ口ちんだから余計に・・・」

最後の言葉の方はほとんど呟いた形になって聞こえなかったがそんな事はどうでも良いくらいにパニックっていた。

つてチート！人の気持ちを無視して目を瞑るなよ！そして懐に入ってくるな！

30分は僕の葛藤が続き、やっと巽が寝てくれたのを見てホッとする。

「こいつ無防備過ぎないか？」

巽のベッドからそっと出て壁にもたれかかる。

携帯チェックして僕も寝よう。疲労困憊だ。

「んー、と、あれ？」

待ち受け画面には着信ありの文字が確認されていた。

発信者はリリ姉で発信時間は今から20分前だ。

僕は慌てて巽の家から出て巽家の前で電話をかける。

しばらくコールが続き5回鳴るか鳴らないかぐらいでリリ姉が出た。

「・・・・・・・・」

「も、もしもし？出て無言は怖いから止めてよりり姉」

「シクシクシクシク」

慌てて僕は携帯から耳を離す。

いよいよホラー染みてきた！

「リリ姉悪かったよ！すぐに出れなくて」

「葉露君がスケコマシだったなんて私は酷く傷つきました。ネネちゃんになんて言えばいいの葉露君？」

「ち、違つよ疚しい気持ちなんか全く無かつたから！ぶつちやけ白状すると勉強の手伝いしてもらつただけだから」

僕の必死の言い訳は、尚も続く。つていうか言い訳じゃなくて事実！

「ごめんよりり姉！必ず埋め合わせするからこの通り許して！」

「埋め合わせ・・・ですか？」

言つた瞬間にしまったと思つた。

「埋め合わせ・・・ならいいよ葉露君。許すね」

「いや、あのりり姉」

「全く葉露君は困つたさんだよ！もつと女心というものを理解するべきだと思つよ。私に告白してすぐに他人の女の子の家に泊まるなんて、私・・・悔しいですっ！」

「随分古いギャグを突っ込んできたねりり姉。分かつてるよこれつきりだからさ」

最近は何例になつてしまつたりり姉のお説教も心地いい今日はりり姉と全く話していないせいかも知れないけど

「葉露君が留守中の間にえっちい本を3つも発見しちゃつたよ。もちろん没収だからね」

「ごめんなさい、もう本当にこれつきりだから」

あれ？おかしいな目の前が霞んで見えないや

「葉露君が手を離れたら私なんかすぐにどこかに行つちやうんですからね！」

「うん」

「盗んだバイクで走り出すかも知れませんか」

「それは止めようか」

そんなりり姉との何でもない会話も楽しくて僕は改めてこの人が好きなんだなと認識出来た。

「あ、後さりり姉もう泣くのは止めよう。僕もりり姉が泣いてると辛くなる」

「それは葉露君次第だよ。葉露君次第で私はいつも笑っている事も出来ませし」

「うん。そうだね。電話ありがとうリリ姉！」

「夜更かしはメツだよ葉露君。・えへへ。お休み」

「うんお休み」

リリ姉との電話が終わり携帯をポケットにしまう。

夜空を見上げながら僕は大きく息をはいた

「リリ姉がずっと笑っていられるかは僕次第・・・か」

なら頑張ろう。リリ姉にはもう泣いてほしくないし

姉さん僕はもう好きな人を泣かしたりしないから  
そう誓うよ。

夜空に光る一際綺麗に輝く星を見て僕は言った。

15話 決め技は覚悟（前書き）

次が折り返し地点ですね。

なるべく早く更新出来る様に頑張っていきます！

## 15話 決め技は覚悟

昨日は、帰るやいなや当然の様にリリ姉に説教をされ色々な疲労から逃れるようにほぼ眠っていた僕だが今日は一つ決心している事があつた。杉崎鍵先輩と話をした誤解を解こうと思っていた。

現在、学校にリリ姉と向かっている途中で未だにリリ姉の機嫌が悪い。

「リリ姉さあ・・・もう許してくれてもいいんじゃないかな？あれは色々仕方なかつたんだよ」

「葉露君には失望です！もうこれはデート拒否されても文句は言えませんよ！」

ずつとこんな調子である。

そんな一方通行を散りばめた会話を校門前まで繰り広げ、それは意外な人物によつて打ち切られた。

「アゝキゝバゝハゝ口ゝ！」

「えっ？誰？僕の事を意味の分からない呼び方してる奴は」

「俺だよ！俺っ！ちよつと待てよ！」

僕らの目の前に颯爽と現れたのはクラスのお調子者の虎太郎だった。つていく校門の前で寄りかかつて待ち伏せをしていた。

何のつもりだろうかこいつは。

「虎太郎、悪いが僕達は急いであるから話は後にしてくれ」

今僕は焦っているのだ。一刻も早く杉崎先輩にあつて誤解を解かなければいけない

「まあ待て、2分で終わる」

「なにさ。虎太郎の工口談義になんか付き合ってる暇はないよ」

「ちがあああああう！！椎名真冬の事だっ！」

「うゝゝゝゝゝゝ」

最近椎名とは色々な事があつたから何となくクラスの皆には目を付けられてたのは分かっていたが遂にキタかと思つた。

それにしてもあまり話したいような事ではない。最近、僕は椎名に苦手意識を持つているからだ。前から苦手ではあったけどまた違う苦手意識が芽生えていた。なんとというかめんどくさい心境だ。

「アキバ、お前最近協定を破ってるんじゃないか？」

「え？協定？」

「……ああ、クラス全員（僕除く）が椎名に心酔して、お互いに牽制しあつて身動きが取れないからたまに行われる椎名争奪戦の勝者以外は一切椎名に絡むのは禁ずるとかいう意味不明なアレか。

「アキバを常々監視していたらやっぱりこれだ。やはりお前はムツツリだつた訳だな」

「人聞き悪いな虎太郎君。僕はそんなつもりはないし、これからもない」

「だいたいリリ姉が隣にいるのにこういう話は止めてもらいたい。

昨日だつて不純異性交遊がどーだとしつこく言われているんだからそんな事を思いながらチラツとリリ姉を見る　　って姿が見当たらない！

今まで隣にいたリリ姉がいつの間にか消えていた。

「あれ？リリ……じゃなかった。委員長！」

リリ姉の姿を求めて辺りを見回してみるとそこには僕にとって予想外な光景が広がっていた。

「あつ！いた」

僕のちょうど背後で誰かと話しをしていた。しかも相手は

「えつりり姉……」

男だった。

「おい、アキバ！お前な、人の話しを遮つて何をしてんだよ」

虎太郎が何かを言っているが僕の耳にそれは届かなかつた。今僕はリリ姉が仲睦まじく話をしているその光景に何も考えられない状況だからだ。

男は銀髪で細身で顔は男物の制服を着こんでいなければ女と間違え

てしまう程の女顔だった。

しかもリリ姉凄いい笑顔だし！・・・あんなリリ姉の顔見たの久しぶりだし、そんな顔を出来る程に相手と親交している事も僕は知らなかったし・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヤバい泣きそうだ。校門の中心で泣いてしまいそうだ。誰かに思い切り抱きついて泣きたい。

もう誰でも良い！虎太郎でもいいっ！！

「うううええああいいいいい！！」 「ちよっ！何やってんだよアキバっ！抱きつくなバカ野郎」

僕はすがる様に虎太郎の胸に抱きつき泣いた。周囲の校門を過ぎていく生徒はこの光景にドン引きだろうがそんな事は構わない。

「わっ！秋峰君と虎太郎君が愛しあっているですっ！これは真冬は意外な組み合わせだっただけに興奮を隠せません！大スクープですうううう！！」

「ああ！椎名さんに見られた！ち、違うんだこれはアキバが勝手に・・・でも注目されてるのが嬉しいこの状況どうすればいいんだあああああ！！！！」

誰かが歓喜の声をあげているがそんな事に構っていられる状況ではなく僕はチャイムがなるまで虎太郎に抱きついていた。

なんか虎太郎すまん。今思えば校門前で凄い力オスな展開だったな。うん、ごめん。

「中目黒先輩？」

朝のホームルームが終わり、絶望ムードから少しだけ復活した僕は勇気を出して委員長にさっきの人との関係を聞いてみた。

「はい。実は色々あって中目黒先輩とは良く話す機会が増えてるんですよ」

中目黒先輩、確か杉崎鍵先輩と仲が良い人だったけかな？一部の人にはその愛嬌ある顔立ちが凄い大好評とか何とか。だけど、これは内心穏やかじゃなくなってきたな。

恋の気配すら見せなかったから安心してたけど意外なライバルが出現してしまった。

色々確認すると委員長は僕の事をまだ好きかもわからないのだ。もし中目黒先輩と何かがキツカケで友達という認識が恋に変わったら

・・・

「ふぐっ！」

「どうしました葉露君？鮭がマシンガンで撃たれたみたいで顔して」

「そのボケにツッコミを入れる余裕はないんだ委員長」

また泣いてしまいそうだ。僕のメンタルよわ

「おいアキバ！話がまだ終わってないぞ」

声のする方向を向くと虎太郎がこちらに向かってくる。

「き、きました。また新たな展開が繰り広げられるのですかっ！」

そして隣ではさっきから目に明らかに光を宿しているバカー名がいるがこちらスルーで

「虎太郎、だから僕は全くそういうのないから」

「お前逃げる気が俺に恐れをなしているんだろ」

「悪いけど、チャランポランの虎太郎に臆するのは毛虫ぐらいしかないよ」

「恋人にしてライバル・・・これは真冬の心を更に揺さぶりますうぐ！！」

「アキバっ！勝負だ！」

「残念だな虎太郎、チャイムだ」

そう告げた瞬間にチャイムがなり虎太郎は舌打ちをして自分の席に戻っていった。

あーこんな事してる場合じゃないんだ。早く杉崎鍵先輩に会わないといけない。

そして昼休み僕は遂に行動を始める。

「アキバっ！」

「悪い虎太郎、これから一世一代の勝負なんだ。また今度な」

虎太郎を振り切り、僕は二年生のいる教室へと向かう為階段に上がった。

階段を一段昇る度に、不安と鼓動が激しくなってきた。憧れの杉崎鍵先輩に拒絶されないかと恐れていた。

そして二年の教室がある二階までついてそこで深呼吸し一気に杉崎先輩がいる教室へと向かった。

周りは昼休みなのもあり混雑していて僕を見るたびに珍しい物を見るような感じで見てきた。

恐らく一年が二年の教室を訪れる事なんてないのと、新聞が影響しているのだろう。

教室をソーツと覗くが生徒はいるものの肝心な杉崎先輩が見当たらない。どこにいるのか教室の隅から隅まで見渡すがやはり見当たらない。

と、後ろからいきなり声をかけられた。

「お、お前まさか真冬と騒動になってた秋峰って奴かー！」

いきなり声をかけられたせいで後ろにジャンプしてその人物を見た。「やっぱりそうだ。いやびっくりしたぞ！まさか真冬が男に絡んでたなんてさ」

ツインテールで少し目付きが悪いがこの人は知っている。椎名の姉の椎名深夏さんって人だ。生徒会に選ばれていたのを見ていたから

「あついきなりすみません！こんな所にきて」

「いやいいよ。だいたい理由は分かる。鍵だろ？」

「は、はい！」

「今さっきまでそこで外眺めてただけどいつの間にかいなくなっ

ちやつてさ。っていうかあいつ最近はずっと窓から外見てるばかりでさっ！みんな心配しててさ」

やっぱり杉崎先輩は落ち込んでいたらしい。その事実には僕はガックリする。

「あ、お前が悪いんじゃないんだからさ気にすんな！なんなら会ったらボディーブローかましてやれ」

アハハと笑いながら言う深夏さんにつられて僕もぎこちなく笑った。

「とりあえず今はあいついないしさ。また今度来いよ！」

「ありがとうございます」

僕は深夏さんにサヨナラを言い階段を降りる

そして

「秋峰」

「えっ？」

階段を降りる途中で声をかけられて振り向くと、そこには

「待ってたぞ。話があるからちょっと来てくれないか」

杉崎先輩が階段から僕を苦笑して見上げていた。

## 16話 強い人

杉崎先輩に後ろから不意に自分の名前を呼ばれ戸惑いつつも、僕は杉崎先輩に付いていく事にした。

憧れの人が目の前にいるせいか鼓動は物凄く早くなっていた。そして杉崎先輩の後ろ姿を見上げると罪悪感がふつつつと沸き上がってくる。

階段を登って、また登って、遂に最上階まで来た。

僕が以前に来た場所で前は屋上は開いていなかったけど

「誰にも聞かれたくないだろ？お互いに」

杉崎先輩は屋上の鍵を開けた。手を見ると鍵をくるくる回していたので恐らくどこからか拝借してきたのだろう。どうやってかはわからないけど

空は雲一つ無く澄みきっていて秋の風が時折吹いて気持ちがいい。杉崎先輩は手すりに寄り掛かり、手を顎に近づけ何かを長考していた。僕も杉崎先輩の言葉を黙って待つ。

「・・・ずっとさ、考えてたんだ」

「はい？」

「あの新聞を見てから」

新聞とはあの事だろう。杉崎先輩から言われて気まずい気持ちになる。

「いきなり言うのもなんだけど俺はハーレム目指してんだ」

「はい、知ってますよ」

「ああやっぱり一年にも知られてんのか」

クククと軽く笑う杉崎先輩を黙って見つめる。

「全ての女の子を幸せにするのが俺の夢でさ、女の子が幸せなら俺も満たされるっていうか幸せになる」

僕が一つ言葉を挟もうとしたが杉崎先輩は続ける。

「最初見たときはビックリしたよ。真冬ちゃんが他の男と一緒にいてさリリシアの所に直接聞きにいったら写真見せられて、ああ本当なんだってな」

「……あの」

「実を言うとな、俺は心配してんだよ。お前の事」

杉崎先輩の突然の言葉に僕はビックリして思わず思っていた事を言った。

「怒らないんですか……？」

「ん？」

杉崎先輩は少し笑って

「怒らねーよ。秋峰のせいじゃないからな。むしろ」

俺のせいだからと小さく呟き杉崎先輩は笑った。

「そんな、僕は杉崎先輩に酷い事をしたのに！」

むしろ怒って欲しい気持ちが強かった。ただ笑ってくれる事の方が僕にはこたえた。

「真冬ちゃん、な、多分秋峰の事が好きだと思う」

「え……？」

突然の言葉に口ごもる。何故か気持ちが落ち着かない

「男嫌いの真冬ちゃんがああいう事をしたのは今までにないからな。俺にすら」

「……でも、僕には」

「好きな人いるんだろ？まあ誰にでもいるだろうさ」  
見透かされたように杉崎先輩が言葉を挟む。

少し間を置いて

「はい。だから、僕どうしたらいいかも」

「お前のしたい様にすればいいんだよ」

「でも、杉崎先輩の推理が正しかったら椎名を傷付ける結果になり

ますよ」

「だとしてもだ。なーなーまま行く訳にも行かないんだろ？下手すれば二人とも傷つく可能性だってあるぞ」

それは確かにそうだ。どちらにせよ決着を着けなければいけない

「一つ気になったんですけど、杉崎先輩の幸せは女の子を幸せにする事ですよね？」

「ああ」

「それって、傷つく事もたくさんあるんじゃないんですか？主に杉崎先輩が」

「幸せってさ何かを犠牲にしなきゃ得られないんだよ」

やっぱりこの人は凄い。僕の見えていない事が見えている。しっかりと未来を見ている。

「色々相談しても・・・大丈夫ですか？」

「困った事があるならいつでも、な」

杉崎先輩が僕の頭をポンポンと叩く。

「何で僕に優しくしてくれるんですか？」

告げると杉崎先輩は少し淋しそうな顔をして

「お前がさ、昔の俺と被るんだよ」

そう言った直後にチャイムが鳴った。

## 17話 負けた方は

教室に戻る途中、階段を降りながらある一つの事を考えていた。杉崎先輩の言葉が、頭の中を駆け巡っている。

真冬ちゃん、な、多分秋峰の事が好きだと思う

その言葉に対する答えがどうしても見つからない。考えても考えても、わからない時はドツボにハマるからこの問いは後回しにしてもう一つ

これが一番、僕を悩ませているかも知れない。

お前がさ、昔の俺と被るんだよ

どういう意味何だろうか？杉崎先輩にも同じ状況が合った？

そう考えた直後、また頭の中にある出来事が浮かんできた。

桜野先輩と話をしていた時の事を。

もう凄い淀んでる感じだったよ。あれは杉崎が1年の時と同じ状態だね

1年の時、それって恐らく『昔、杉崎先輩に起こった何か』が影響していたって事なのだろうか。

そして杉崎先輩は僕が昔の自分と被る、そう言ったんだ。

「はぁ・・・」

詳しい事は、まだ結局分かっていない。頭が痛くなってくる。問題が山積みだ。

重い足取りで教室に入ると、クラスメートは次の授業の準備を始めていた。委員長はもう教科書等を机に並べて着席している。

少し、委員長を見つめ席につく。そして隣には何故か席に座ってうとうとしている椎名

すかさず盗み見を試みる。僕の事を椎名が好きなんてあり得るんだろうか。

疑問は頭の中をぐるぐる周り、考える事に必死で椎名が僕を見ている事に気づくのが遅れた。

しばらくお互い無言で見つめあっている形になって慌てて目を反らす。

椎名が僕の事を意識している、そう考えただけで椎名の顔をまともに見れない。

顔は赤くなって、おそらく耳まで赤くなっているだろうが仕方ない。僕だって男子高校生なんだ。

「あのさ・・・椎名」

聞いてみよう。そう思って話しかけた。

けど、椎名からの返事はない。

怖い物でも見るかの様な慎重さで、僕はそっと顔を横に向けた。すると、椎名は再び目を瞑って夢の中に再突入していた。

僕の勇気を返して欲しい。

授業が始まり、僕も黒板に意識を集中させる。しばらくは教師が説明をする声と、ペンの音だけが教室に響く。

「あ、あの・・・秋峰君」

聞こえるか聞こえないかぐらいの、か細い声が聞こえてきたので、声がする方向を向く。

呼び掛けてきたのは椎名だ。

「なに？」

「非常に恥ずかしくて、他の人には言いにくい事なんですけど」

「お、おう」

顔を赤くしながら、話す椎名の緊張が僕にまで移ってくる。

頭の中にちらついたのは告白。

「ま、まて今はまだ」

止めようとしたが、その願いは叶わず椎名が僕の目を見て、伝えた。

「あの、期末の為に勉強教えて欲しいんです」

「え？」

拍子抜けな問いかけに間抜けな声を出してしまった。

「勉強なら先生がいるだろ。僕は教師じゃないぞ」

「し、知ってるです。その秋峰君に教わりたくなって」

「何ゆえに？」

「秋峰君そこそこ勉強出来ますし、隣の席だから頼りやすいというか」

言ってる間に椎名の視線が頭から足元まで下がっていく。その様子は凄く魅力的で思わず口元がにやついた。

「良いけど、椎名お前今まで勉強っていうか嫌な事とか、争いとかから、皆無で育ってきただろ」

「な、何故それを。確かにお姉ちゃんに守られてきたおかげでそういう事からは逃げ回っていました・・・」

お姉ちゃんとは先程会った、椎名深夏さんの事だ。確かにあんな人が身近にいたら嫌な事から逃げ頼ってしまっただろ。その果てが椎名だ。

「ライバルがいなきゃ、勉強だってスポーツだって上手く伸びないんだよ」

ライバルがいなくなたって伸びる人はいるけど、それは才能だろう。

「ライバルですか？」

僕は、わかりやすいように椎名に説明しようと思った。

「ほら、椎名がやるRPGだって敵がいなきゃレベルは上がらないだろ？」

「た、確かにそうですね。現実でも重要なんですねライバルって」

大丈夫だろうか、椎名は。いやマイペースというか、精神年齢が大人分、実年齢を下回っている気がする。

「って事で期末テストの点数勝負すつか」

「えええ！無理ですよ。秋峰君に勝つなんて」

「だから勝負する代わりに、僕が椎名に勉強教えてやるよ」

「ライバルに修行を教えるもらっ展開ですか。確かにそれは燃えな

展開ですっ」

椎名からの返事はOKで、負けた方は相手の言う事を何でも聞くというペナルティーが与えられる事になった

「あ、後さ椎名、お、お前の」

「はい？」

「し、椎名の好きな人って……」

「おい、秋峰、さっきから何話してんだこらー！」

その後の言葉は、虎太郎によって遮られた。

授業中ということもあり僕はその後は、椎名とは話さずにノートをとった。

この質問はまた後日という事になりそうだ。

## 18話 後、二週間

学校が終わり、自宅に帰ってきた僕はさっそく勉強に打ち込んだ。リリ姉は文化祭の準備があるらしくまだ学校にいる。

去年の文化祭って何やってたっけなあ。中学の文化祭でも、確かり姉に付いて歩き準備を進めていた記憶が朧気になり、確か駄菓子屋をやった。

今年は高校生での文化祭で自分自身とてもワクワクしている。空き時間に、チャンスがあればリリ姉と一緒に回りたいと考えたりもしてる。

勉強を一時間ぐらいした頃に、インターホンが鳴った。おそらくリリ姉だろうと思い、急いで玄関に向かう。

玄関を開けるとやはりリリ姉が鞆を両手に持ち、疲れた顔で立っていた。

「大分、疲れてるけど大丈夫？お風呂沸いてるから、リリ姉先に入っつていいよ」

「そうだね。じゃあお言葉に甘えて」

そう言っつてリリ姉は、自分の部屋に戻って行った。

そんなリリ姉の後ろ姿を見ると、色んな感情が沸き上がってきた。色々な話しをしたいとか、どこかに一緒に出かけたいとか、そう考えてしまう。

そして中目黒先輩と言っただろうか。

リリ姉が本当の所どう思っつているのか、物凄く気になる。

だけど聞いて確かめたい気持ちはあるのにどこか知りたくないという弱気な自分もいた。

リリ姉には、勢い余っつて告白してから未だに返事待ちで待っつているのは辛いけど今は、このままでいいんじゃないかと感じていた。

そして、もう一人頭に浮かんでいた人物がいた。椎名真冬だ。何故、浮かんできたのかは定かではないけどおそらく杉崎先輩の言った言葉が気になってるからだろう。椎名が僕を好きだという事を聞いてから色々考える事が多い。ざわつく心を沈ませる様に天井を見つめて、深呼吸を繰り返した。

「それで、何で遅かったのさ。リリ姉？」

「文化祭の準備に忙しかったの」

風呂に入り夕食を食べ、リビングで少し休んでいる間に僕とリリ姉はそんな事を話していた。

「確か椎名のゲームのあれだよな？」

文化祭で何をやりたいかを決める会議で椎名が提案した、ゲーセンならぬゲーシツ（ゲーム教室）が採用されていた。

「うん。必要な物は全くなくてね、テレビとゲーム機とカセットとコントローラーと景品があれば大丈夫」

「だよな」

「ゲーム機とカセットとコントローラーは椎名さんが持参するらしいから問題なくて、テレビも理科室のを使っていいってさ」

「まあ、あんまり予算は使わないから学校側は大喜びだね」

そこで残っている問題は景品か。だけど、疑問に思った事がある。

「景品は必要かなー？景品ってゲームに勝った人に渡すんでしょ？やるのは当然椎名なんだし、負けるわけがないと思うんだけど」

椎名は生粋のゲーマーでゲームを取ったら何も残らないと自ら言っていたし、それだけ自信があるのだろう。

「私もそう思って、言ってみただけど、この学園を甘くみてはいけないって言われたんだよ」

「ああ・・・」

その言葉で納得する。確かにあの学園は色んな意味で普通ではない人達がわんさかいるから負けはないとは言えない、か。

「じゃあ、景品を何にするかで遅くなっただね」

「椎名さんが万が一負けた時を考えて高い物にするか安い物にするかで議論が白熱しちゃって」

学校側は出来れば安い物がいいはずだから安い物を提案する。ただし生徒側は椎名さんが負けた時には納得する物を渡さなければいけないという白熱した議論を繰り広げている様子が頭に浮かびあがってきた。

確かに、これは泥試合だ。

「でも、まだ文化祭まで二週間あるんだしさ、ゆっくり考えればいいよ」

「そうだね。あつ…葉露君」

リリ姉は視線を左右に流しながら、言った。

「好き」

「え!？」

リリ姉の思いがけない一言で僕の心臓は一気に鼓動が激しくなる。

「ゲーム」

「え?」

しかし、すぐに気持ちは萎んだ。

「うん。別に嫌いではない…よ」

「そっかー!葉露君なんか浮かない顔いつもしてたから本当は文化祭楽しみじゃないのかなーって思ってた」

文化祭は楽しみにしている。っていうか多分今までの文化祭の中で一番楽しみにしている。

しかし、浮かない顔をしているとは自分自身気づかなかった。おそらく考え事をしていたせいかもしれないけど

リリ姉は僕の言葉に満足したのか席を立ち、鼻歌を歌いながら二階へとあがっていった。

「後、二週間か」

文化祭まで二週間。その後は期末ですぐに来年になる。

「卒業式までは後6カ月か」

杉崎先輩との別れまでも後少ししかないのだと気づく。  
そう思うと、胸が微かに痛んだ。

## 19話 夜の告白

「出る――！――！！！！！！」

「いや、今の状況だと、出たが正しい、の、じゃないかと、思い、ます…はあ」

僕は、夜の校舎を椎名の手を引いて一心不乱に走っていた。

何故かって？出たからです幽霊が

全力で走っているにも関わらず後ろから聞こえる恐ろしいうめき声と人間には出せない様な速さで距離は完全に縮まってきている。

「真冬、もう、無理です…」

「あつ…！！」

掴んでいた椎名の手が解かれ、少し後ろでへたってしまったていた。おいていく訳にもいかず頭を整理しようとするも出来る訳がない。

遂に、足音がすぐその曲がり角まで近づいてきた。僕は椎名を守る様に体を抱き締め、目を閉じた。

どうしてこうなってしまったのか、始まりは6時間前に遡る。

碧陽文化祭まで気づけば一週間に迫っていた。僕達1-Cはといえば、特別用意する物が無くいつも通り帰宅をした。

の、だが僕と椎名は別だ。文化祭用の新作ゲームを買いに行く用事があった。

もちろん教師は後ろ向きな姿勢だったが椎名の熱い抗議に負け、費用が下りた。

そして教師から何故か僕と一緒に行けと命令された。

一つの理由は生徒が余計な物を買わないかの見張り

そしてもう一つはその椎名と行くクラスメートが僕を除く全員が椎名を溺愛してしまっている為に、二人きりにすると色んな意味で危ないから

らしい。

「秋峰君？何ボーツとしてるんですかつ！新作ですよ！しかも大人気のメーカーさんが出している新作だからすぐに売り切れてしましますよ！早く行くです！」

「・・・はいはい」

ゆっくりと自席から立ち鞆を肩に掛け椎名と廊下にする。

出口に向かうついでに、他の教室を覗いて見ると文化祭の準備を楽しそうに行っている生徒達がいた。

自分のクラスの温度差と無意識に比較してしまいやるせない気分になるのでそれ以降は他の教室を横切っても見ないよう心掛けた。

校舎を出る前に色んな生徒から疑惑の眼差しを受けたが一切気にしない様な雰囲気を出して誤魔化した。決して付き合っている訳ではないという意味もなく心の中で何度も呟いた。

「ここですよ！ありますように」

しばらく椎名について行くと、椎名がそんな声をあげた。行き付けのゲーム店らしく、椎名は急いで店内に入って行った。僕も黙って椎名についていく。

店内には当たり前前だけたくさんのゲームがあり、また凄いこみ合っていた。

「なるほどな。確かに椎名の言った事はまんざら冗談じゃなさそうだ」

人を掻き分け椎名を探す。辺りを見回していると不意に肩を軽く叩かれた。

「ゲットしました！」

満面の笑顔を浮かべる椎名の手にはしっかりとお目当てのものを掴んでいた。

「良かったな。じゃあさっそく会計をつて・・・おい、椎名さん！」

「ちよつと待つて下さいです秋峰君！まだ真冬が知らない名作が埋まっているかも知れませんか！しばし待つて下さい！」  
そんな言葉を残して椎名は店の置くに消えていった。

「まあ、少し位ならいつか」  
僕は店から出て外にあるベンチに座り椎名を待つ事にする。

「椎名も珍しく熱くなる事があるんだな」  
教師に語った抗議は、普段やりなれている物ではフェアではないという事だった。

新作ゲーなら対等に戦える。よりお客が、それに自分が楽しめる。それが一番の理由らしい  
「ん？ちよつと待てよ・・・」

ここで引つ掛かる事があつた。新作ゲームなら対等に戦えるそれはまだいい。それで文化祭が終わつたらそのゲームはどこに行く？もちろん椎名の元だ

「あいつ・・・こわいな」  
まさに一石二鳥だ。結果、椎名は労せず新作ゲームをゲットしてしまった。

普段何も考えていない様で実は誰よりも頭が良いのかも知れない。そんな椎名にゾクツときた

「偶然だろうな。結果的にこうなっただけで」  
僕は汗を垂らしながらそんな言葉を呟いた。  
待っている途中にリリ姉との会話を思い出す。結局あの話し合いで景品は無しになつたんだっけ。

「新作のゲームに予算を使つたら景品は無しになりますね」

「そうだよな。じゃあやっぱり・・・」

「はい。景品を無しにしましょう！」

「はい！？」

何故か委員長がガッツポーズを決めながらとんでもない事をいい始めた。

「いや景品は客引きには必要だよ委員長」

「だから景品がある様に振る舞えばいいんですよ」

「それって詐欺だよな？」

「大丈夫です。椎名さんが負けるはずがないですから」

「負けたら？」

「開き直ればいいんです！」

「やっぱり詐欺だよな!？」

目を輝かせる委員長に僕は必死で説得を試みる。

「いや、だけでもその情報が広まったら客なんて来ないよ」

「いやーしかし名案ですね葉露君！自分を誉めたいです」

「どうして僕の周りの人物は人の話を聞かないんだ!！」

「葉露君！人の話ちゃんと聞いてますか！」

「あれおかしいな？委員長の事をこんなに好きなのに今は話したくない気持ちでいっぱい何ですけど？」

「離したくない？」

「いや、何でもない。何か間違ってる気がするけどもう何でもいいよ」

そんな昼休みの出来事だった。

### 3時間後

「うわーっ星が綺麗だなー！あり得ないよこんなのって・・・」  
実は一時間経った時から嫌な予感はしていた。椎名にそろそろ帰ろうと告げて聞こえていなく真剣な眼差しでゲームを品定めしていたので仕方なく待ち続けていた

「結果がこれか・・・」

「秋峰君？何独り言を言っているんですか？早く行きますよ」

椎名が店内からやっつと、本当にやっつと出てきた。

お目当ての新作ゲームを買った袋を手に持ちながら満足そうな顔を浮かべて

「その台詞、椎名にだけは絶対言われたくない！」

帰りの際にリリ姉には遅くなるとメールしていたのでその点は帰ってどうなる訳でもないので心配はない

「あのー秋峰君」

問題は隣を歩く椎名だ。こんな遅くまで女の子をつれ回していたと思われたら姉である深夏先輩に殺されかねない。

「どうした」

「お願いがあります」

「僕の出来る範囲の願いなら叶えてやるよ」

「今から一緒にこのゲームやりませんか？」

「どこで？」

いきなり叶えられそうにもない願いがきてしまった。

「僕の家は無理だぞ。理由は分かるよな？こんな夜中に女の子を家に入れるなんて行動は出来ない。もちろん椎名の家も却下だからな。理由は言わなくても大丈夫だよな」

「もちろん、違います」

そういうと、椎名は鞆からあるものを取り出した。

「それ、何の鍵・・・」

何かを言おうとする前に答えが分かってしまった。

「お前まさか」

「そうですねよ秋峰君。学校です！」

「この悪女め」

校舎の門を登り、先に行っていた椎名の後を追いながら言った。

「実は夜の学校は密かに憧れていたんです」

「僕はあまり好きじゃないんだけどな」

夜の学校は幽霊が出るという噂がいくつもある。

幽霊は信じていないけど苦手だ。幽霊が怖くないって言ってる奴が幽霊なんじゃないかと思っっている。

ちなみに合鍵は紅葉先輩という人から借りたらしい。まだ会った事はないけど学校の合鍵を持っていて尚且つ生徒会の一員の人物だ。普通な訳がない。

椎名にどんな人なのか聞いてみたら

「そういう人です」と軽くひきつった笑みを浮かべたのでその先は知らない。

「開いたですよ秋峰君！早く早く」

急いでと手招きする椎名に促され校内に入る。

「うっ……」

辺りは真っ暗で非常階段の行き先を示す緑色のランプの明かりが不気味に光っている。

「秋峰君もしかしてこういうの苦手なんですか？」

「そ、そんな事ない」

「声震えてますよ」

「椎名は怖くないのかよ！普通ビビるって！」

「真冬は、コー ス・パーティーをやりまくっていたのでそこまですでもないです！」

自信満々に言い放つ椎名に軽く突っ込みを入れよう

「あれ、人たくさん死んでるよね!？」

情けないが、とても前を歩く勇氣はないので椎名の隣を寄り添う様に歩く。

「どこに向かっているんだよ？」

「理科室です。あそこはテレビありますから」

「理科室って……」

あそこ人体模型やら不気味な物がたくさんあるところだよな。なんだかコツコツと響く自分の足音まで怖くなってきた。

理科室の前まで来ると、椎名がもう一つ鍵を取り出した。もはや突っ込みを入れる必要もない

紅葉先輩だろう。

キーンと不気味な音を立てながら扉を開く。

「あ、ちゃんとありましたよ。テレビ」

テレビをさっそく見つけると椎名は急いで理科室に入った。僕も恐る恐る入る。

椎名はテレビの前に座り、鞆からゲーム機を取り出す。っていつかいつも持ち歩いてんのかそれ！

「接続完了ですっ！」

鼻歌を歌いながら椎名は新作ゲームのディスクを取り出しセットする。内容は格闘物のゲームでキャラクターが30人以上いるらしい。

「ほら、秋峰君早くやりましようよ！」

「分かった分かった」

一刻も早く終わらせて学校を出たい僕は拒否する事なくコントローラーを一つ掴んだ。

「また全敗かよ」

10回戦までやって結果は当たり前前の様に全敗。

椎名もこのゲームに関しては、初心者の筈なのに

「お前説明書すら読んでないのに普通に良く操作出来たな」

「真冬のゲームの才能です！」

「何故かあまり欲しくならない才能だな！」

椎名は満足したらしく、ゲーム機を片付け鞆に入れた。

僕もホッとして鞆を肩に掛け椎名が片付け終わるのを見計らい、椎名と一緒に出口へ向かった。

その時だった。

ギーと僕達が入ってきた入口が開いた音がした。

直感的に足を止める。額からは汗がドバッと吹き出す。

体は対照的にもの凄く冷えてきた。

「見回りの人・・・かな？」

一つの希望を見つげようと椎名に尋ねる。

「さつきまでいた様な気配がありませんでしたけどね・・・」  
さすがの椎名も不安顔になっている。

これは覚悟を決めるしかないようだ。

僕は椎名の手を掴みドアを勢いよく開けた。

「きゃっ！ちよつとあ、あ、秋峰君？」

開いてすぐ椎名を引つ張り廊下に出た。

こうなれば大量勝負だ！！！！

「出るーーーー！！！！！！」

「いや、今の状況だと、出たが正しい、の、じゃないかと、思い、ます…はあ」

僕は、夜の校舎を椎名の手を引いて一心不乱に走っていた。

何故かって？出たよ幽霊

全力で走っているにも関わらず後ろから聞こえる恐ろしいうめき声と人間には出せない様な速さで距離は完全に縮まってきている。

「真冬、もう、無理です…」

「あつ…！！」

掴んでいた椎名の手が解かれ、少し後ろでへたつてしまっていた。おいていく訳にもいかず頭を整理しようとするも出来る訳がない。遂に、足音がすぐそこの曲がり角まで近づいてきた。僕は椎名を守る様に体を抱き締め、目を閉じた。

「あああきいいいみいねええええ」

目の前から怒声が聞こえた。

「ヒィっ！許して下さい！殺るなら俺だけにして椎名だけは！」

「おう！もちろんそのつもりだよ！イスカンドルまでぶっ飛ばす！  
つてあれ？この声どこかで聞いた様な・・・

そう思った直後、椎名から引き剥がされ羽交い締められる。

「お、お姉ちゃん！？」

「真冬待つてるよ！今この野獣をミンチにしてやるからな」

「って深夏先輩ですか！？何でこんなところに・・・ウグツ！」

羽交い締めにされた首に力がゆっくりと入ってきた。

「そりゃあこつちの台詞だなあ秋峰。あたしの妹をこんな夜遅くに校舎に連れ込んで何してた？おう！」

「お姉ちゃん誤解です。真冬達はゲームを」

「夜のゲームだあ！？こりゃあ脳と心臓以外の構造をぐちゃぐちゃにするしかねえなあ」

「いや止めて下さい！何ですかその恐ろしい必殺技」

10分後やつとの事で深夏先輩の誤解が解け、拘束からほどかれた。今は帰り道を僕、椎名、深夏先輩で歩いている。

俯く僕に椎名さんが肩を回して笑顔で

「何だよー！結局あの人の悪戯だったのかよ！ごめんな秋峰」

「いや、もう大丈夫です。夜の校舎に入った僕達が悪かったんですから」

真相は紅葉先輩が深夏先輩に「秋峰君が真冬ちゃんを校舎に連れ込んでいたのを見かけたわよ」という残酷な結末だった。

「結局、紅葉先輩に遊ばれただけか・・・」

すべて思い通りに動かされていた事を知り体の力が抜けた。

「あ、あたし買い物して帰るから先に帰ってくれ！秋峰は真冬をしつかりと家まで連れて帰る事な！」

深夏先輩も少し罪悪感があったのか僕達から一刻も早く離れたい様な雰囲気醸し出していたので僕達はただ手を振って見送った。

再び二人になるが椎名の家までは二人共に終始無言だった。お互いに疲労困憊だったからだ。

やつとの事で椎名の家まで着いた。

「ありがとうございますました秋峰君」

「いや、いいよ。でもこれからはこういうのは無しな  
そう言つて、僕は自分の家へと帰ろうとする。」

「あ、秋峰君……!」

後ろから不意に椎名に呼ばれたので、振り返る。

「どうした？まだ何か」

「今日このような事をしたのはですね、あの、秋峰君と思い出を作  
りたかつたんです!」

椎名が頬を赤くし僕の目を見ないで目を泳がせながら言う。

「思い出？」

「今日、ずっと言おうと思つていて言えなかつたんですが」

椎名は一度そう言つて、目を閉じ深呼吸をした。黙つて僕も続きを  
待つ。

「真冬はですね。今年度で転校する事になりました」

その言葉にきよとんとする。こういつ時どう言つた言葉を言えば良  
いのか僕にはまだよく分からない。

ただ今だけは純粹に自分の思つた事を口にしよう

「それで無理して思い出を？」

「はい……」「バカかお前は」

「すみませんです」

俯き、シユンと椎名が萎む。

「無理して思い出なんか作るなよ。作りたいなら言えつて。僕が出  
来る限りの思い出を椎名に作つてあげるからさ」

「えっ？」

綺麗な言葉なんて並べられない。僕に出来るのはばか正直に素直な  
気持ちをぶつける事だけだ。

「椎名が転校するのはまだまだ先だろ？すぐじゃない。時間はたく

さん残ってるんだ！その出来る限りの時間をめい一杯使って思い出作ってやるから」

「は、はい。あ、あの、」

何か取り返しの付かない事を言っている気がしたが、今は気にしたら負けな気がする。振り返るのは後でいいんだ

「後、ですね・・・」

「まだ何かあるのか」

「『椎名』じゃなくて『真冬』って呼んでほしいです」

顔を真っ赤にした椎名に釣られ僕まで一気に顔が赤くなる

「な、何で!？」

「さつき秋峰君がお姉ちゃんのを下の名前で呼んでいて何か真冬だけのけ者見たいで嫌だなんて」

「お前そんな恥ずかしい事を！」

「思い出ですよ！秋峰君」

「クツ・・・」

さつきそく嫌なところをついてきた。

「わかった。だけど教室では呼ばないからな。僕の命が危ないから」

「?はい、じゃあ教室以外では下の名前で」

「わつーたよ。もう遅いから帰るぞ」

これ以上いたらもつと無茶な願いを言われそうなので次の言葉を聞かずに立ち去る。

紅葉先輩・・・覚えていて下さいよ！この仕返しはいつか、いや卒業式に返しますから!!

最高で最悪なお返しを考えながら僕は帰路についた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4788u/>

---

生徒会のIf

2011年11月7日11時08分発行